
テイルズオブエクシリア～紡がれし思い～

青猪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア〜紡がれし思い〜

【Nコード】

N7413Y

【作者名】

青猪

【あらすじ】

事故により死んでしまった少女、楠くすのきえりん恵凜。彼女は神と出会い、リゼ・マクシアに転生してジュードの妹として育ち、ジュード共に旅に出る。

そして、恵凜はこの旅で自分自身の秘密を…過去に消された思いを知る事になる。

プロローグ：神との出会い（前書き）

初めまして、青猪です。

この小説は私が初めて書いたものなので

- ・文法が粗い。

- ・誤字がある。

- ・投稿がまちまち。

等あると思います。

でもどうか、生温かい目で見守っていただけたら幸いです。
よろしく願います。

プロローグ…神との出会い

はじめまして、私の名前は楠恵凜。くすのきえりん 何処にでもいるフツートの女子高生（15歳）です。

突然ですが私は今日、事故で死にました。

下校途中の道で友達と別れた直後、猛スピードで2メートルトラックが私に突っ込んできたんです！

私は成す術もなくトラックに衝突され、更に後ろにあったビルの壁（コンクリート製）にトラックと一緒に突っ込み……もう散々な死に方だよ！！即死だよ！！（涙）

そして、死んだハズの私は今、何故か真っ白な空間にいます。

「……一体ここは何処ですか。」

私は呆然とした感じでそう呟いていると

「ここは次元の狭間だ。迷いし魂よ。」

「うわっ?! 後ろ?!」

いきなり話し掛けられてビックリしながら振り返ると、そこには全身ローブで覆った人物が居た。

ローブのせいで顔はほとんど見えないが、声や感じからして男性で、そんなに年は離れていない。

唯一見える瞳は淡い蒼をしている。

「……あんた誰？」

私がそう聞くと

「我はお前達人間から神と呼ばれし者。」

と男性は答えた。

（――は？何言ってるんだこの人……フツー信じないって、そんな事。）
そんな事を考えていると

「信じろとはいわぬ。だが我は正真正銘、ここを管理する神なのだ。」

（――って、心読まれた？！……まあ、悪いひとではなさそうだし……何でこうなったか聞いてみよう。）
そう思い話そうとした瞬間、

「うむ。では何故こうなったのか答えてやろう」

（ってまた心読まれた！）

「勝手に心を読むなー！」と言う私を無視して神様は話を続ける。

「お前は本来、死ぬハズではなかった。だが、お前の運命は何かの影響を受け狂いが生じてしまい、それが原因で死んでしまった。更にその狂いは、お前の魂を世界の理から外してしまい、ここに来てしまったのだ。」

「ふん……」

（何か二次小説によくある転生ネタだね。）

「うむ、まさにその通りだ。お前にはこれから異世界へ転生してもらう。」

「だから勝手に心を読むなー！！って、ホントに行くんだ異世界……元の世界には戻れないの？」

「残念だが、不可能だ。その世界への道がなくなってしまったからな。」一刀両断ですか……。まあ、起こってしまった事を嘆いてもしょうがないよね。

「はあ……わかった。早くその異世界に転生させて。」
私は溜息をもらしながら神様に言った。

「うむ、では入口を開こう。」

「うん。……ところで私が転生する世界って何処なの？」
そう聞くと神様は

「すまないが、何処に行くかは我にも分からぬ。」
と言われてしまう。

不安にはなるけど、「考えていても仕方がない」と思い気持ちを切り替える。

神様の方を見るとちょうど入口を開け終わった所だった。

「そこに入れば異世界に転生できる。気をつけてな。」

神様は心配そうに言った

「ありがとうございます、神様。それじゃ、行ってきます！」
私は入口に飛び込んだ。入った直後に強烈な眠気に襲われ、自分の意識が薄れていくのを感じた。

――
惠凜が飛び込んだ入口を、ただジッと神である男性は見つめていた。

「あの日からもう2000年、時が経つのは早いものだ……我がやれる事はもうない。後はお前次第だ、惠凜……いや――。」
神は呟く様に言い、何処かに消えていった……。

プロローグ：神との出会い（後書き）

主人公が訪れるのは、15年位前のリーゼ・マクシアです。

0 話…転生、そして…（前書き）

まだプロログの様なものです…。
すみません（汗）m（ ）m

0 話…転生、そして…

目を覚ますと、何処かの洞窟の入口だった。

何でこんな所にいるんだ？ と思い、移動しようとしたが、何故か上手く体を動かせない。更に…

「あう、うあゝ」

言葉も話せない。

（もう！ 一体どうなってんのよ？！）

私はワケが分からず体を起こそうと動く。ふと視界に入る自分の手を見てピタ…と動きを止める。

そして恐る恐るもう一度、自分の手を見てみると…そこには可愛らしい赤ちゃんの手があった。

（何で私赤ちゃんになってんの？！コレって転生の影響？！というか私、このままじゃ間違はなく死んじゃうよね？！転生してすぐ死ぬなんて嫌だ！誰か助けて〜！！）

私はパニック状態に陥り泣き叫ぶ。すると泣き声を聞いて誰かが近づいてくる音がした。

「この辺りからなのだが…ッ？！赤ん坊だと！」

私を見つけた人は男性で上だけ縁のない四角い眼鏡を掛け、白衣を着ていた。どうやら医者らしい。

「材料探しのつもりがまさか赤ん坊を見つけるとは…それにして

も酷い事をする。」

男性は悲しそうに呟きながら私を抱き上げ、

「とにかくここは危ない、早く街に戻るとしよう。」男性は私を連れて来た道に戻っていった。

その後私は男性の家である治療院で幾つか検査を受けた。

何処も異常はなく、すぐに検査は終わり、今は看護師の女性に抱かれながらミルクを飲んでいる。

本当は肉とか食べたいが、今の体ではミルク以外口に出来ないのだから仕方がない。

ちなみにこの女性は男性の妻だという事、私と同じくらいの子供がいる事が二人の話から分かった。

そしてなんと、夫婦が私を家族として迎えようという事になった。

(……でも、二人には子供がいるのにいいのかな……)とも思ったが、今の私は行く宛てもなく、何も出来ない。二人の提案に有り難く甘える事にした。

こうして、私はこの二人に……マティス夫妻に引き取られ、二人の息子であるジュードと共に本当の兄妹の様に育てられた。

そして、あれから15年の歳月が過ぎた。私は今、定期船の誰もいない甲板の隅で

「うゝみゝはゝ広いゝなゝおおきゝなゝゝ、これかゝらゝ向かうゝはゝ王都ゝイル・ファゝゝン」

と陽気に歌っていた。

私はこれからラ・シュガルの首都、イル・ファンへ向かっている。

理由は久しぶりにアニキ：ジュードに会うためだ。

始めジュードに会いに行く事を父さんと母さん：ディラックさんとエリンさんに言ったら

「ジュードの勉強の邪魔になるから。」

と、二人に反対されてしまう。

まあ、予想通りではあるけどね。

だから日が昇る前に必要最低限の荷物をまとめて、机の上に“アニキに会いに行ってきます”とメモを残してこっそり家を出て来たのだ。

手伝いをすっぱかし、父さん達には悪いと思ったけど、手紙のやり取りだけでは何か心配なんだよね。

「……アニキはお人よし過ぎるし、お節介だからなあ。」

だから、実際に会って本当に元気か確かめたい、久しぶりにジュードと話したいと思った。家に帰ったら説教や手伝いの量倍増が降りかかるのは確実だが、それも覚悟の上だ。

それに会って土産話をしたらすぐに帰るつもりだし。まあ、帰る前に街道にいる魔物と手合わせしたり、何かお土産を買ってくけど……。

「とにかく、早く着かないかな。」

私はウキウキしながら夜域に入った空を見上げた。

0 話…転生、そして…（後書き）

次はオリキャラのプロファイルです。

オリキャラプロフィール（前書き）

タイトル通り、オリキャラのプロフィールです。

オリキャラプロフィール

名前… テスラ・マティス

性別… 女性

年齢… 15歳

身長… 160cm

体重… 謎

一人称… 私

戦闘スタイル… ジュードと同じ格闘家スタイル。だが、ジュードと一部使える技が違い、投げ技が使える。

精霊術も使える。（ただし、初級のみ）

特性… カウンター… 敵の攻撃をバックステップで回避した後、敵をダウンさせる攻撃を繰り出す。

サポート… 追い撃ち… リンクしてる時に敵をダウンさせると、投げ技で追撃する。投げられた敵はダウンが解除される。

レベル… 6

装備… 武器… スチールリスト

頭… ニット

体… ラメラガード

装備… クローナシンボル（拾われた時から持っていた）

武身技… 掌底破、三散華、迫撃掌、軽岩碎落撃（序盤に使える技。まだ増えます。）

精霊術… ファイアボール、ウィンドランス、ロックトライ、スプラ

ツシュ（序盤に使える精霊術。もちろん増えます。）

特徴…瞳と髪は薄いグレー。

男女どっちつかずな顔をしている。

髪は背中まで伸ばし、ポニーテールで纏めている。

霊力野がかなり発達しているが、何故か初級の術しか出来ない。
胸がレイアより小さい。

性格…明るく前向きだが、楽観的な所もあり、少しせっかち。

動物全般が好き。（魔物も含まれる）

度胸があり、何事にも果敢に立ち向かう。

歌う事が好きだが、人前では滅多に歌わない。

追記…普段は治療院の看護師の手伝いをしている。そのため、医療の知識もジュード程ではないがある。

顔等のため、よく男と勘違いされる。

髪を伸ばしたのも、男と勘違いされないようにするため。だが、あまり効果はない。

レイアより胸がない事に軽いコンプレックスを抱いている。（転生前は同じくらい）

様々なバストアップ法をやっているが、全く報われない。

歌は前いた世界の曲を歌う事が多い。そのため、他の人に極力聞かれないようにしている。（曲の説明が面倒だから）

初級の精霊術しか使えない事を本人は気にしてない。（生活に支障はないから。）

オリキャラプロフィール（後書き）

今後の展開でプロフィールの追加、または変更があると思います。
次からやつとジュード君出ます。ミラは……ちよつとだけ（汗）

一話：再会と出会い（前書き）

話の進みはかなり遅いです……。

一話…再会と出会い

船に揺られて数時間、7の鐘の少し前に私はイル・ファンの海停に着いた。

「うわあ……凄い。」

さすが夜光の王都と言われるだけあり、海停からも幻想的な輝きが見える。

「…っと、見取れてる場合じゃないや。早くアニキに会わないと。」
私はジュードが通っている学校、タリム医学校へ向かった。

学校はすぐに見つかった。……というか海停出てすぐ目の前にあるから迷いようがない。

私は学校の中に入り、受付の女性に話し掛ける。

「あの、ジュード・マティスさんに会いたいのですが。」

「はい。少々お待ち下さい。」

受付の女性が何かを確認し、

「ジュードさんは今、研修中ですので、待合室でお待ち下さい。」

私は受付の女性に御礼を言い、待合室の入口で待つ事にした。

待合室で待つ事約10分。見慣れた黒髪が診察室の廊下から出てくるのが見えた。

「ヤッホー！アニキ、久しぶり。」

来る事を知らせてないので、声をかけられたジュードは凄く驚いた顔をしていた。

「テスラ?! 何でここにいるの?!」

「何でって…もちろん、アニキに会いに来たんじゃん!」

まあ、当然の反応か…と思いながらも話を続けようとしたら

「ごめんテスラ。僕これからハウス教授を迎えに行かなくちゃいけないんだ。話はその後で……」

「なら、一緒に行けば問題ないじゃん。ハイ決まり! それじゃ、レッツらゴー!」

そう言って私は歩き出した。

「ちょ…テスラ! ……もう、相変わらずなんだから。」

ジュードも急いで追いかけていった。ハウス教授がいる研究所に向かいながら、私はジュードと話をしている。今は研究所にいますというハウス教授について話していた。

「……へえ! そのハウス教授の研究が今年のアオ賞に選ばれたんだ。すごいね!」

ちなみにアオ賞とは、私がいた世界のノーベル賞の様なもので、研究者にとってすごく名誉ある賞だそうだ。

「うん! だから早く教授に知らせたくて、僕が迎えに行くって言ったんだ。それにしても、5の鐘には戻るって言ってただけだなあ

…どうしたんだろう。」

「ま、これから迎えに行くんだから、その理由も分かるでしょ。……にしても、随分精霊術を失敗する人が多いね。」

話しながら周りも見ていたが、かなりの人達が精霊術を失敗しているのが見えた。

さっきも発光樹の整備をしようとした人が術を使ったが、発動できずにいるのが見えた。

「うん。今日僕の所にきた患者さんの大半が、術の失敗で怪我した人達だったんだ。その人達に霊力野の異常はなかったんだけど……みんな同じ事を言ってたんだ。」

「同じ事？」

「うん。“精霊がないようだ”って、みんな言うんだ。」

「精霊がない?…」

(精霊がいなくなるなんて聞いた事がないよ……けど、霊力野に異常がないのに失敗するなんて、一体何が起こってんの?)

そう考えてる内に研究所へ到着した。しかし……

「えっ?! 教授はいない?」

「ええ、ハウスという方は既に研究所から出ていますね。」

門番の兵士にハウス教授はもう研究所を出て帰った、と言われてしまう。

「…それ、出所記録ですか?」

ジュードはもう一人の兵士が持っていた出所記録を見せてもらっていた。

私も横から覗き込むと、そこには確かに“ハウス”と書かれた文字があった。

「納得してくれたかい？」

ジュードはその文字を見て眉をひそめるが、兵士に「ありがとうございませす。」ときこちなく言いながら出所記録を返し、兵士から離れていった。

慌てて私も後を追いかける。「アニキ！どうしたんだ、一体？」

私は様子がおかしいジュードに声をかける。門番が見えない所まで来て、ジュードが口を開く。

「出所記録に書いてあった教授のサイン…あれ、偽物だった。」

「え……偽物って…？」

そう言った私にジュードはある物を見せた。

それは単位申請書で、そこには、先程の出所記録と同じく“ハウス”と書かれていた。だが、記録書の文字と比べると形や筆圧が全然違う。

「どうなってんの…」

「多分、教授はまだ研究所にいるんだ。」

何故わざわざ偽物のサインをしてまで教授は帰ったと嘘を言ったのか……考えられる事は一つ

「何かヤバイ事をやっているのかもしれない……ねえ、アニキ…真

相を確かめにいかない？」

「ちょ?!…いきなり何言い出すのさ!」

「でも、アニキだって気になるんでしょ。教授の事。」

「それは…そうだけど…」

すると突然、発光樹の明かりが次々と消えていった。

「な、何?!何が起こったの?」

「…やっぱり、精霊がおかしい?」

ジュードが呟いた瞬間、強風が吹き、申請書が飛ばされてしまう。

「あっ?!」

「なにやってんだよ、アニキ…」

そう言いながらジュードと一緒に申請書を追いかけて、下に流れる川を覗き込む。そこで私とジュードは信じられないものを見た。

女性が水面を歩いている。金髪で髪は腰まであり、私達より少し年上の女性だった。足元をよく見ると、水面に青く丸い魔法陣が浮かんでいる。

彼女はそのまま橋の下を通り抜けていくのを見て、私達も後を追いかけた。

彼女は鉄格子のついた地下水路の前で足を止めると、片手を差し出す。すると、途端に炎が溢れ、鉄格子を簡単にひしゃげてしまった。

「…あの女性、何者なんだろう?アニキは…」

「どう思う？」と、聞こうとしてジュードを見たら……あの水面に浮かんだ魔法陣の上に乗っていた。

（何やってんだアニキ?!）

と私も急いで模様の上に乗るが、模様が奥から次々と消えていつてのに気づき、急いで先にある魔法陣に向かう。

「アニキ、早く前行って！魔法陣が消えてってる！」

小さい声でジュードに言うが、驚いたジュードの声で女性に気づかれてしまった。敵意は感じないけど、まずい事にかわりはない。

「あの……」

ジュードが話し掛けたら、彼女は“静かにしてほしい”と、人差し指を立て口に当てる仕草をする。

「危害は加えない。静かにしていれば、な。」

彼女はそう言い放ち、先程破壊した地下水路へ向かおうとした。……が、

「その先は研究所だよね……？君は一体……ッツ?!」

「この状況で何聞いてんだよ、アニ……ッツ?!」

状況にも関わらず女性に話し掛けるジュードに呆れて、思わずツツコんだ瞬間、私達は謎の水球に捕われてしまう。

何とか周りを見ると、あの女性が何か術を使った事が伺えた。

「静かにしてほしいと、頼んだつもりだったのだが……」

流石に息が苦しくなり、私とジュードは“静かにする”と首を縦に何度も振る。

それを見て女性は術を解いて私達を解放する。私は深呼吸を繰り返して、ジュードは水を吸い込んだのか噎せている。

「咳は……まあ大目に見よう。君達はそこで何をしていた。」

「……………喋っても？」

ジュードは一度確認をとる。まあ、あんな目に遭うのは一回で十分だ。

「僕は、その…落とし物を拾おうとして……」
そう言って手に持った申請書を見せる。

「私はアニキが先に行くから追いかけたらこうなった。」
私も理由を説明した後

「そうか。」
とだけ言って、さっさと地下水路へ向かおうとした。

「何するつもり？すぐに警備員が来るよ。」

「なので急いでいる。君達は早く帰るといい。不審者として、捕まる前にな。」

女性はそのまま水路に入っていく、私達二人だけが取り残される形となる。

「……さて、どうしようか？」
私から話を切り出す。

「どうする？って言われても……」

「いっそのまま研究所に入って、教授探そうよ。」

ちなみに水面の魔法陣はすぐそこまで消えていて、さっきの場所にはもう戻れない。

「……研究所から出るにしても、僕達だけじゃ捕まっちゃう。ハウス教授を探して、一緒に出よう。」

ジュードは水路の中に入っていく。

私もジュードの後を追って、水路へと入っていった……

一話：再会と出会い（後書き）

色々なアドバイスや感想を待っています。よろしくお願いします m（

） m

二話…失われた力（前書き）

戦闘の書き方が難しいです…。

二話…失われた力

地下水路を進み、見つけた梯子を登って研究所の中に入る。

「ハウス教授はどこかな？　こう広いと、探すの大変だよ。」

「とにかく、部屋を一つ一つ探すしかないよ。行こう。」

私達とはかく部屋をしらみ潰しに調べた。途中、2階の部屋に誰かが入っていくのを見かけ、私達もその部屋へ入った。

部屋は暗く、さっきまで調べた部屋とは何か違う感じがした。うっすらと、何か怪しい液体が満たされた筒状の装置も見える……。

すると突然、ジュードの後ろにあった筒の中からドン！！と叩く音が聞こえ、私達は慌てて振り返り筒を見る。

よく見ると、その筒の中には人が……液体の中で浮かぶ一人の人間が苦痛の表情を浮かべながら張り付いていた。

「だ、騙し……な……もう……マナ……で……い……」

「……教授……？」

中にいる人間を見て、ジュードはか細い声で“教授”と呼んだ。
(この人がハウス教授?! 助けないと!!)

私は勢いよく飛び、渾身の一撃を筒に当てた。だが――

「割れない?! なんで……」

筒にはヒビ一つ入らない。何度も攻撃するが、割れる気配は全くない。

「……た、たす……け………」

その瞬間、ハウス教授が力無くうなだれ、身体が泡の様に消えてしまった。

「……そんな…死んだ…?」

「教授……何で………」

(一体……一体何が起こってるの?)

そんな疑問が私の中に生まれる。だが、突然声が響いた。

「誰だ?」

すると、暗かった部屋に明かりがつく。そこには更に悲惨な光景があった。

先程の装置がいくつもあった。全ての筒の中には人がいて、中の人全員が力無くうなだれていた。

もう見ただけでわかった。この人達は……もう生きていない。

ジュードも“信じられない“という顔をしていた。

「あゝあ。見ちゃったんだ。」

声が聞こえた方を見る。上の部屋に赤い服をきた少女が、私達を見下ろしていた。

「侵入者って、あんた達の事なの?」

「なんなのここ?! ハウス教授はなんで...?!」

ジュードは少女に聞くが

「アハハッ! その顔... たまんない...」

少女は聞く耳持たずでそう呟く。そして――

「:絶望する人間って!!!」

私達に襲い掛かってきた。

ジュードは何とか攻撃を回避する。しかし――

「遅せえんだよ!!」

「アニキ!!」

少女は回避したジュードにすぐに近づき、手にした仕込み杖で切り裂こうとした。私はジュードを庇う様に前に立ち、少女の攻撃を籠手で受け流す。

「くっ?!」

以外と力が強く、少しでも気を抜くとガードが崩れてしまいそうだ。

「へえ、思ったよりやるじゃん。でもさ...」

少女は素早く離れ、詠唱を始める。

（マズイ! 阻止しないと!）

そう思い、急いで少女に近づき、迫撃掌を放とうとした。だが――

「遅せえつつてんだよ!! 燃え尽きろ! バースプレット!!」

「しまった?!」

少女を中心に床が灼熱の大地に変わり、私に襲い掛かる。

「があああああっ?!」

もろに攻撃を受け、私はその場に倒れ込む。

「テスラ?!」

「他人の心配してる場合か? ああ?!」

ジュードは私に近づこうとしたが、少女が横から迫ってきた。

ジュードも何とか戦うが防戦一方だ。ついには、壁際まで追い込まれてしまう。

少女はジュードの首に杖を構えて笑う。

「アハハ。もう終わりか、つまんねえの。」

「……アニキ…ツツ」

私はジュードを助けようとしたが、身体が言う事をきかない。動く事すら満足に出来なかった。

「……ヘエ。中々タフだな、お前。…だけど頑張っても意味ねーぜ! お前も、コイツも、これから死ぬんだからな!!」

少女は嬉しそうに叫ぶ。その顔は、まさしく狂喜と呼ぶに相応しかった。

「死……いやだ……何か…何かあるハズ…」

ジュードはそう呟き、何とかこの状況を打破しようと考えを張り巡らす。

「……なぐに冷静になってんだよ!!」

ジュードの様子に少女が激怒し、杖をジュードに振り下ろされる。

「アニキ!!……?」

最悪の結末を予感したが、突然少女の手がピタッと止まる。

「アハハ。…侵入者って、アンタの方か。」

何だと思ったが、ふと入口の方を見る。

そこには水路に入る前に会った、あの金髪の女性が佇んでいた。

「つまらないんだ、コイツら…だから、アンタから殺してやるよ!!」

そう言って詠唱を始める。

「逃げて!!」

ジュードは女性に逃げるよう叫ぶが、女性は逃げる所か、応戦してきた。

術がぶつかり合い、打ち消される。少女は術が消された事に逆上し

「デメエ……!その顔、グチャグチャにしてやる!!」

武器を構えて女性に迫っていく。

「それは困る。」

女性は言い放ち、片手を前にかざし、叫んだ。

「イフリート!!」

その瞬間、女性の前に炎が溢れ、炎を纏った大男が姿を現す。
大男はその大きな腕で、迫ってきた少女を吹き飛ばした。

「帰れと言ったはずだ。それとも、ここが君達の家なのか？」
少女を吹き飛ばした後、女性は私達にこう聞いてきた。ちなみに私は今、ジュードに治癒功をかけてもらっている。

「ち、違うよ。僕達はハウス教授を探してここに來たんだ。…でも、教授は死んじゃって…」

「というか、頼まれてもここには住みたくない…。」

ジュードは真面目に答え、私は冗談を返す。

だが女性は答えに興味はないらしく、ピクリとも動かない少女に近づいて床に落ちていたカードキーを拾う。

その後、周りの装置を見て呟く。

「これが黒匣^{ジン}の影響……？ 微精霊達が消失したのも、これが原因？」

「え、何……微精霊が消えたって……」

ジュードは女性に聞こえとしたが

「君達は早く帰るといい。次は助かるという保障はないのだから。

——黒匣は…何処か別の場所か。」

女性は部屋を出ようとした。

「待って！」

ジュードが女性を呼び止める。

「ア…アニキ？」

「その…当てがないんだ、僕達。教授がいたら出られたかもしれないけど…だから、一緒に行ってもいいかな？」（成る程な。でもそんなすんなりOKが出るはず…）
そう考えた私だったが…

「確かにそうすれば次も助かる。…君は面白い考えをするな。」
女性は笑いながらそう言い

「いいだろう。好きにすればいい。」
あっさりOKが出た。

…何か深く考えた自分がバカに思えてきました。（涙）

「ありがとう。僕の名前はジュード・マティス。」

「私はテスラ・マティス。よろしく…。」

「私はミラ。ミラⅡマクスウェルだ。」

（マクスウェル？精霊の主と同じ名前…何か関係あるのか？）

「ここでマナが吸い上げられているとすれば…向こうか？」

ミラは呟いた後、素早く部屋の出口へ向かっていく。

「ちょ、ちょっと待ってよ。ミラ！」

「おい。私を忘れるな。」
私達もミラを追いかけた。

「何？コレ……。」

そこは研究所内とは思えない程広く、大きな空間だった。そして、その中央に鎮座する様に巨大な装置が置いてあった。

その装置を見た瞬間、ミラは険しい顔をした。

「やはりな……黒匣^{ジン}の兵器だ。」

（ジン……聞いた事ないな。何なの？）

聞き慣れない“ジン”にどういう物なのか考える。ジュードは操作盤を動かして、何かを調べている。

「“クルスニクの槍”……創世記の賢者の名前だね。」

「でも、何処が槍なんだ？コレ……」

ジュードとやり取りをしていると、突然ミラが両手を使い、魔法陣を浮かび上がらせる。

「クルスニクの名を冠するとはな。これが皮肉と言うものか……。」
そう呟いた後、高らかに叫んだ。

「やるぞ！人と精霊に害なすこれを破壊する！！」

瞬間、ミラの周りを囲む様に4人の人影が現れた。一人はさつき見た炎の大男、一人は水を纏った女性、一人はゴーグルを掛けた少年、一人は地球儀に乗った幼児。

その4人からはそれぞれ地水火風のとてつもないマナを感じた。

「四大精霊……本物の？！」

「四大精霊?! って事はミラは本当に、精霊マクスウェル?!」

(マジでマクスウェルか…神様と会った時を思い出すなあ。)
そうこうしてる間に大精霊達は槍の上で何か術を展開している。

(凄まじいマナの量だ…あんなの喰らったらず助からないな…
……………ん? あれは…)

大精霊達を見ていた視線の隅に何か動く人影を見つける。その人物は……

「デメエら…ムカつくんだよ!!」

「アンタさっきの! ……って一体何する気?!」

赤い服の少女が何か操作盤を使い指示を出す。

突如クルスニクの槍が動き出し、先端部分が展開され、何か十字架の様な模様が見えてくる。

——異変はすぐに訪れた。

「なっ?! な、んだ…これ…?!」

「っ……霊力野に……直接、作用してるんだ!」

身体中のマナが霊力野から吸い出される感覚に襲われ、立つ事すらままならない。

「バカ者! お前とて、無事ではすまないぞ?!」

「アッハハハ! く、苦しめ! 死んじゃえー!!」

少女はそう叫び、倒れてしまった。

だが、これで装置が停止するハズもなく、マナを奪われ続ける。

（このままじゃマズイ！どうすれば…ん？）

「少し…予定と、変わったが…いささかも、問題は…ない！」

ミラもマナを吸われ、立つ事もままならないはずなのに…一歩、また一歩と装置に近づく。

「装置を止める気…？…どうして、そこまでして…」

「強いな…ホントに。…私は…」

一歩も動けず、ミラを見る事しか出来ない自分に齒噛みする。

「なにっ?!」

「ミラ?!…ツ?!」

「なんだ?!…がっ?!」

ミラが装置の手前まで来た途端、魔法陣が展開され、更に靈力野から吸われるマナが増える。

「お前達！引きずり込まれるぞ！」

四大精霊も魔法陣に捕まりマナを奪われ、段々と姿が霞んできている。

（ハウス教授の二の舞になっちゃう…どうすれば?!）

すると何処からか声が聞こえた。

「え…四大精霊？」

ジュードがそう言い、四大精霊達を見る。大精霊達は私達を見つめ、

声ならぬ声で伝える。

「…ミラを…連れて、逃げろ…?」

「何?…最後の力をつて?」

「まさか…」

私は四大精霊が自分自身の命をかけてミラや自分達を助けようとしているのだと、私達にミラを託そうとしているのだと察した。

次の瞬間、四大精霊達が一斉に力を解放した。余りの威力に私達は吹き飛ばされて落ちそうになるが、橋の手摺りに何とか掴まり落下を防いだ。

槍の方を見ると、四大精霊達が槍の中に吸い込まれていく様に消えていくのが見える。

「ミラ?!」

「くっ!せめてこれだけは…」

ミラは操作盤の部品の様な物を掴み、引き抜こうとしている。

「くう!つつ!」

ガコン!!

操作盤から部品が外れる。だが、その勢いでミラは吹き飛ばされてしまう。

さらに、私達がいた橋がさっきの衝撃で崩れ始めた。私達は縁に掴まり何とか堪える。

ミラは橋の残骸の上に着地し、さっき引き抜いた部品を小さくして
急いでしまう。その後、片手を翳すが……何も起こらない。

ミラは驚いた顔をして、下へ落ちてしまった。

「ミラ!!」

「アニキ! 行こう!」

私は手を離し、ミラの後を追う。

その後、ジュードも意を決して手を離し、落ちていくのが見えた……

二話：失われた力（後書き）

次はあの傭兵がでてきます！

三話：脱出（前書き）

戦闘が思うように書けない…

三話…脱出

ザバア!!

「ハア…ハア…ミラって、泳げなかったんだね…」

「ハア…ハア…中々、ハードだった…」

「ゲホッ、ゲホッ…ハア…やはり、ウンディーネの様にはいかないものだな」

私達は、装置の下にあった水路を通じて研究所から脱出した。今は橋の下にある足場で息を整えている。

いやゝ、大変だった。全然泳げてないんだもん、ミラ。犬かきすら全くできてない溺れっぷりで、助けようにも泳ごうと暴れてるから、ジュードと二人掛かりでようやく救出できた。

呼吸を整えた後、ミラは何度も四大を召喚しようとするが…やはり出来ない。

「……やっぱり、四大精霊の力がなくなっただ…」

「多分、ね……ミラはどうするの？あのクルスニクの槍って装置、素手や普通の術じゃ壊せないよ。それこそ、四大精霊達の力がないと…」

私はミラにそう言うと

「あいつらの力、か……。

——ニ・アケリアに戻れば、或いは……」

（ニ・アケリア……確かア・ジュールにあると言われる幻の村、って旅人が言ってたような……）

「世話をかけたな、ジュード、テスラ。君達は家に帰るといい。」
そう言い残し、ミラはさっさと行ってしまった。

再び、私達は取り残される形となる。

「……どうする？」

「……とりあえず、街に戻ろう。」

私とジュードは橋の上へ戻った。そこでは――

「貴様！研究所に侵入した者だな？！」

「違う、と言えば通してくれるのか？」

武器を構えた兵士とミラが対峙していた。「ミラ！」

（バカ！ここで声をかけたら……）

「貴様達もこの女の仲間か？！」

「不用意だな、ジュード。無関係を装えばいいものを。」

「全くだよ……しかも何か集まって来たし。」

奥から兵士が三人、こちらに走ってきた。

「援護するぞ！」

「助かる！さあ、大人しくしろ！！」

四人の兵士に囲まれる私達。

ミラは怯む事なく、一人の兵士に剣を振り下ろす。――が

スカッ

(……………へ？何、今の？完全に素人の振り方じゃん！！)

「ミラ？！剣使った事ないの？！！」

ジュードが驚いて聞くと

「うむ、今までは四大の力を借りて振るっていたからな……………こうも勝手が違うとは……」

「ま、マジですか…………」

つまり、今のミラは正直言うと戦力外に等しい。

「ふん！たいした事ないな。他は弱そうな小僧二人だけだ！取り抑えるぞ！！」

兵士は意気込みながらそう言い放つ。

「…随分舐めた口じゃん…………アニキ！ミラの援護をお願い！私以外の三人を何とかするから！」

「え、でもテスラは怪我を…………」

「私は大丈夫だよ！だから早くミラを！！」

「わ、分かった！無理しないでね！」

ジュードはミラが戦っている場所へ向かった。
それを確認し、私は兵士三人を見る。

「俺達三人を相手だと？随分舐められたものだな。」

「ふん！身の程知らずが！」

「そんな細い腕でどうやって 戦う気だ？」

私はゆっくりと箠手を構える。兵士達は“やれるものならやってみろ”と言わんばかりに挑発している。瞬間、私は一氣に中央にいた兵士に近づく。

「なっ?!」

「早い?!」

あまりの早さに兵士達は反応出来ずに驚愕していた。

「…遅いよ、掌底破！」

私は中央の兵士の鳩尾にありつたけの力を箠めた掌底破を繰り出す。
兵士は吹っ飛び、倒れ込む。

「貴様!!」

右側にいた兵士が私に向かって武器である槍で貫こうと迫ってくる。
私はさっきダウンした兵士に近づき、身を屈める。

「バカめ！スキだらけだ!!」

兵士は勝利を確信した様に言う。
だが、兵士は正面から突如攻撃を喰らう。一体何が起こったかわからない様子だ。

理屈は簡単。私がさっきダウンした兵士投げ飛ばし、突っ込んできた兵士にぶつけたのだ。

二人の兵士は気絶したらしく、ピクリとも動かなくなる。

「言っとくけど、私は女だし、人を見掛けで判断すると痛い目に遭うんだからね。今みたいに。」

「おのれ!!」

左側にいた兵士もこちらに迫ってきている。

そして、持っている槍で攻撃してきた。

だが私は、落ち着いてバックステップで回避する。

兵士がかわされた事で一瞬無防備になり、私はすかさず間合いを詰め、迫撃掌を繰り出す。

兵士は体勢を崩され、地面に倒れる。

「スキ有り!」

私は兵士の身体を掴み、真上に投げ飛ばし、私も真上にジャンプする。そして、兵士の前にきた瞬間、両手を互いに握りしめ、兵士の身体に叩きつけた。

「軽岩碎落撃!!」

兵士は頭から思いっきり地面に叩きつけられ、気絶した。

ふと、ジュードとミラの方を見ると二人の方も終わったようだ。

「はぁ……何やってんだろ、僕……」

「何をつて、ミラを助けたんでしょ？」

私は冗談を交えてジュードに返す。

「重ね重ねすまないなジュード、テスラ。それではな。」

ミラは礼を言っただけに立ち去ろうとするが

「待って！……街出入口は普段から警備兵がチェックしているんだ。だから、イル・ファンから出るなら海停から出た方がいいよ。」

「まあ、確かに。この様子だと、もう情報行つて、警備を固めてるだろうしね。」

「そうか、わかった。」

そう言っただけで海停へ行こうとするミラだが……辺りを見回し、何か考え始める。おそらく……いや、確実に海停の場所がわからないのだから。

「海停、知らないんだね……こっち。」

「私も案内するよ。旅は道連れ、つてね。」

案内役を買って出た私達は、ミラを連れて海停へ向かった。

海停に着いた私達は船を止めてる場所へ向かう。だが――

「その三人！止まれ！！」

振り返ると、そこには赤服の兵士が四人、私達に近づいてきた。

「…先生？…タリム医学校のジュード先生？！」

「エデさん？！」

ジュードは兵士の一人をみてとても驚いている。

「知ってる人？」

「うん。僕が受け持った患者さんの一人だよ。」

へえ、と思っているとエデさんは悲しそうな顔をして

「そんな…先生が要逮捕者だなんて…」

と呟く。…え、要逮捕者？と思っていると、エデさんは悲しそうな顔を戻し、私達にこう告げた。

「ジュード・マティス、逮捕状が出ている。その女二人もだ。軍特法により応戦許可も出ている。抵抗しないでほしい。」

（は、初めて初対面で女性ってわかってくれた！！）

こんな緊迫した状況だが、私は自分を女性とわかってくれた事にちよつと感動した。

「待って下さい！！確かに僕達は不法侵入をしてしまいましたが、それだけで重罪だなんて…」

「……それが俺の仕事だ。」

「エデさん!!」

ジュードは自分達は重罪を犯していないと説得するが、エデさん達は私達に武器を向ける。

「ジュード。私はここで捕まる訳にはいかない。」
そう言ってミラは剣を構える。

「…抵抗の意思を確認。応戦しろ!」
エデさんが指示を出し、兵士の一人が術を発動しようとする。

(マズイ後ろには無関係な人が…) 私は掌を上下に合わせる様に構え、詠唱する。

「炎よ弾けろ…ファイアーボール!」

兵士が術を放ったと同時に私も術を放つ。
術はぶつかり合い、消滅した。

その時、船の汽笛が鳴り、船が出航しようとしていた。

「さらばだジュード、テスラ。迷惑をかけたな。」

そう言いながら、ミラはさっさと船に向かって走っていった。
え、何ですか? この使い捨てみたいな感じは…

「さあ、先生。その貴女も。抵抗すれば、その分罪は重くなりま
すよ。」

「僕は、ただ…」

(…やっぱこれは口封じの為だろうな…このまま捕まったら、恐らくハウス教授と同じ運命。けど逃げるにしたって、さっきより強い奴らが四人。今のアニキじゃ戦えない。どうすれば…?!?)

すると突然誰かが私達と兵士の間に入り、素早い動きで兵士達を次々と気絶させていった。

「軍はお堅いねえ。女と子供相手に大人げないったら」

その人は男性で、茶色いコートを羽織り、胸元にはスカーフをあしらっていた。

私達は、突然現れたその男性にただただ啞然とした。

「いいのか？連れの美人が行っちゃうぜ？」

「でも…僕は、」

「軍から逮捕状が出て、特法まで適応されるって事はな、君達はSランク犯罪者扱い。捕まったら…極刑だな。」

「そんな！」

「いや、分かるでしょアニキ！今捕まったら、確実に助からない。逃げるよ！」

私はジュードの腕を引き、船の方へと走る。

後ろを見ると、沢山の兵士が私達を追いかけてきた。

その時、男性が私とジュードの身体を地面と平行になる様に担がれる。

「え、ちょ……?!」

「い、一体なにを…」

「喋るなよ。舌かむぞ?」

そう言って男性は積み上げられた木箱の上を軽々と登り、ワイヤーに繋がれ、宙をぶら下がる鉄骨に飛び乗る。

そして鉄骨の上で助走をつけ、一気にジャンプした。

「うわぁーーーー?!」

「ぎゃぁーーーー?!」

男性は見事な跳躍を見せ、見事に船の中へ入る事に成功した。……ただ私は男性が着地した瞬間、パツと手を放されて床に突っ込んでしまい、額を打ち付けた。とても痛い…(涙)。

「ちょっと、あんたたち?!」

「全く参ったよ、何か重罪人を軍が追ってるらしくてさ。こんないい男と女子供が重罪人に見える?」

男性は船員達にそう言っで服装を整えた。

「あの……」

ジュードが自分達を助けた男性に声をかけると

「アルヴィンだ。」

「え……」

「名前だよ。君は確か、ジュードだったか？」

「う、うん。こっちがミラで、隣にいるのは妹のテスラ。」

「よろしく……っていうか、さっきの着地、凄く痛かったんだけど……
(怒)」

私はアルヴィンに怒りながら言ったが、アルヴィンは「ワリー、ワリー(笑)」と受け流していく。

ふと、アルヴィンは俯いたジュードに近づき

「頑張ったな。」

とジュード言葉をかけた。私はジュードにかける言葉が見つからず、黙ってその光景を見つめていた…。

私とジュードは今、甲板でミラとアルヴィンの身元確認(という名の尋問)が終わるのを待っていた。

ジュードは学生証を持っていたのですぐに解放され、私は未成年である事と、ジュードの説明のおかげで早く終わった。

「ア・ジュール行きだなんて……外国だよ……」

（まあ、ちよつとしたお節介がここまで大事になるとは、私も思わなかったからなあ…それに半分私のせいでもあるし…）
今だにジュードにかける言葉が思い付かず、黙ったままの私。

そこへ身元確認を終えたミラとアルヴィンがやってきた。

「よ、…って随分暗い雰囲気になってんな…それより見ろよ。イル・ファンの夜域がおわるぞ。」

アルヴィンが言った瞬間、星が広がる夜から透き通る青が広がる昼の空へと変貌した。

「にしても、医学生だったとはね。ちよつと驚いたよ。」

「ねえ、聞いていい？」

何で僕達を助けたの？あの状況じゃあ、普通助けないよ。」

（確かに…普通なら無関係なんだからそのまま無視すりゃいいのに…）そう考えてると、

「金になるから。」

アルヴィンはキツパリと答えた。

「私達を助ける事が何故そうなるのだ？」

「あんたらみたいなのが軍に追われてるって事は、相当ヤバイ境遇だ。そいつを助けたとなりゃ、金をせびれるだろ？」

（なるほど。要は報酬目当てか。）

確かにそうかもしれない。だが……

「でも僕、お金ほとんど持ってないよ。」

「あいにく私もだ。」

「私も、今100ガルドしか持ち合わせない…」

アルヴィンは少し固まった後、

「それじゃ、値打ちもんがあればそれでも構わないぜ？」

そうアルヴィンは言うが…

「「「ない（よ）（な）。」「」」

三人の声が綺麗にハモリながら答える。

ちなみにミラは「ニ・アケリアでなら払えるが……」と付け足した。

「んだよ、ボランティアか。……仕方ねえ、ア・ジュールで仕事見つけるか…」

「すまないな、アルヴィン。」

ミラはすまなそうに答えた。

「ところでアルヴィン、あんた何やってんだ？軍の人間じゃないにしては、随分戦い慣れてるし……」

私はアルヴィンに何をしているか聞いてみた。

「へえ、よく見てるな。俺は傭兵だよ、フリーのな。金は頂くが人助けをする素晴らしい仕事だ。」

「ふむ、それは感心な事だ。」

傭兵：成る程、だからあんなに戦い慣れてたワケだ。

：でも尚更、私達を助ける理由がわからない。

私達を助けるより、軍を助けた方がメリットや報酬は高いハズだ。なのに私達を助けた。……何か裏があるのかもしれない。

（まあ、検索した所で答えてくれないだろうし、今は一人でも戦える人が多い方がいいからな…）

そうこう考える内に、アルヴィンに声をかけられる。

「イラスト海停が見えて来たぜ。降りる準備しとけよ。」

「あ…うん、わかった。」

私はそう言って、段々と見えてきたイラスト海停を見つめた……

三話：脱出（後書き）

話のスピードが遅くてすみません…（汗）

四話…異国の地、共鳴の力（前書き）

テスラが以下の技を使えるようになった！

幻竜拳、ファーストエイド

四話…異国の地、共鳴の力

イラート海停に到着し、船を降りた私達。

「へえ。外国っていつでも、あまり変わらないね。」
ジュードがアルヴィンに話し掛ける。

「ん…まあ、ア・ジュールと言ってもこの辺りはな。」

「そうなんだ。…あ、あそこに地図があるよ。見てくるね。」

そう言ってジュードは看板に貼ってある地図を見に走っていく。

「空元気…かね。」

「気持ちを切り替えたのか。見た目程、子供ではないのだな。」

「おいおい、おたくが巻き込んだんだろ？随分他人事の様にな。」
「」

「私は再三帰れと言った。ついてきたのは彼ら自身の意思だ。」

「…成る程、だからミラに当たる訳にもいかず、空元気でワケね。」

「まあ、普通なら原因を作った人に当たるよね…」

私がそう言うと

「妹さんは巻き込まれた割には元気だな。」

「私は何となくこうなる、って予想できたしね。それと、妹さんは止めてよ。私はテストラって名前があるんだから。」

私はアルヴィンに注意して、ミラと一緒にジュードの所へ行った。

「へいへい……どちらも大人な事。」

そう呟きながら、アルヴィンは私達を見ていた。

地図を確認した後、ミラがアルヴィンに剣の手ほどきをしてほしいと頼み込む。

「むしろ雇って欲しいくらいだがな……」

「報酬はないぞ。」

「……なら稼ぎながら修行、ってのはどうだ？」

私達が“？”となっていると、アルヴィンが海停にいた一人の女性に話し掛ける。

「よ、何か困ってるんだろ？俺達でよければ力になろうか。」

「傭兵の方ね、助かるわ。」

そう言って女性は魔物退治の依頼をお願いした。

「依頼は納品だったり、荷物を届けたり様々だ。今回みたいな魔物

退治の依頼をこなせば俺は報酬を、あんたは剣の修行になるだろう？」

「成る程、確かにそれならば実践的な修行になる。」

「それに、困ってる人達を助けられるしね。」

ミラとジュードはやる気満々だ。勿論私もだ。

「それじゃ、魔物退治に行く前にサービスで基本だけでも稽古つけてやるよ。」

「助かるよ、アルヴィン。」

そう言って、邪魔にならない場所へ行き、二人は稽古を始めた。

稽古を始める数十分。

「よし、ここまでだ。」

アルヴィンとミラは剣の構えを解き、鞘に納める。

「礼をいうぞ、アルヴィン。」

「にしても、おたくは随分飲み込みが早いな。」

確かに、ミラはまだ粗削りながらも少し前とは比べものにならないほど腕が上がっている。

「お前の教え方がいいのだろう。」

ミラはそう言い、私達は魔物退治へと出発した。

海停を出るとすぐに、狼の様な魔物が三体、私達に威嚇している。

「ウルフだね。体長は尻尾含めて160cm程で数匹〜十数匹の群れを作って生活している知能が高い魔物。仲間同士の繋がりが強く、協力して子育てや狩りを行うんだ。」

「……詳しいな、お前……」

「まあね〜。魔物含む生き物全般好きだから。」

アルヴィンに聞かれ、私はしれっと返す。

すると突然、全員のリアルオーブが輝き出した。

「リアルオーブが反応し合ってる……」

「おまえらもリアルオーブ持ってたか。そんなじゃ、共鳴リンクいってみますか！」

「「リンク？」」

リンクを知らないジュードとミラは、首を傾げている。

私はある程度知識はあるが、まだ一度もやった事はない。

「実際にやってみればわかるぜ——リアルオーブに意識を集中するんだ……！」

そして戦闘が始まった。

「すごい……これがリンク……」

「ジュードの動きが手に取る様に分かるぞ！」

ジュードとミラはリンクの感想を言いながら、一体のウルフを挟撃している。

「俺達も行くぜ！」

「オッケー！」

私はアルヴィンとリンクし、他のウルフに攻撃を始める。
攻撃して少し経った時、

「そろそろ、共鳴術技出せる頃じゃね？」
リンクアーツ

リンクアーツ：リンクした者同士が使える強力な攻撃の事だ。

「でも私、初めてなんだけど…」

「大丈夫、合わせてやるからよ。」

「わかった……いくよ！」

そう言って私とアルヴィンはリンクアーツを発動する。

私はウルフの背後に、アルヴィンは真横に素早く回り込み、それぞれ幻竜拳と瞬迅剣を交差するように同時に放つ。

「喰らえ！ 衝破十字字！！！」

リンクアーツをまともに受け、ウルフは悲鳴を上げて倒れた。

「ミラ、僕達も！」

「ああ、やるぞ！」

ジュードとミラもリンクアーツを使った。

「「絶風刃！」！」

ジュードの魔神拳とミラのウインドカッターが合わさり、風の衝撃波となってウルフを襲う。

後ろにいたもう一体のウルフも巻き込みながら倒していった。

「友情・協力・勝利！人間らしい戦法だろ？」

「うむ、気に入った。」

「一人じゃないって心強いよね。」

「まさしく“絆の力”だね、アニキ。」

「可愛い事言うねえ、ジュード君、妹さん。」

「だからテスラって呼んでよ！！なんで私だけ名前で呼ばないの？！」

そんな掛け合いをしながら私達は進んだ。何回か魔物と戦うが、全員私達のリンクアーツの餌食となった。

「ところでテスラ。お前、魔物が好きなのによくボコボコにできる

な。普通可哀相とか言いそうなのに。」

「気持ちが全くないと言ったら嘘になるけど、彼等は弱肉強食の世界で生きてるんだ。そんな考えでいたら私はとくに喰われてるよ。私だってまだ生きてたいし。」

「……確かに。」

アルヴィンとそんな話をしながら、湖へと到着した。

そこには、魚なのに手足がある魔物と、でかい蟹の魔物2体がいた。
「ウオントとクラブマンだ。彼等は本来、ここよりも清んだ水が豊富な場所に棲息している魔物なのに何で……」

「詮索は後にしな。早く片付けようぜ。」

「……だね。この辺りの生態系にも影響するかもしれないし。」

私達は武器を構えて戦闘に入る。

「テスラ、いくぞ！」

「任せて！」

私はミラとリンクし、ウオントに向かう。

ジュードはアルヴィンとリンクして、クラブマンを相手している。

「ミラ！ウオントは火が弱点なんだ！だから火属性の攻撃で攻めて
！」

「了解した！」

ミラに弱点を教え、私達はウオントに攻撃を仕掛ける。

「ハアッ！幻竜拳！」

私はウオントの横から殴る。ウオントは私に攻撃しようとするが、そのスキにミラが背後に回り込み攻撃する。

「フレアボム！！」

ウオントは爆風に吹き飛ばされ、倒れる。

私はウオントを掴んで真上に投げ飛ばし、自分の両手を握りしめてウオントに振り下ろす。

「軽岩碎落撃！！」

ウオントは地面に叩き突けられ、倒れる。

「何度見ても豪快な技だな。…だが、わざわざ真上に飛ばすのは大変ではないか？」

「まあ、元々は小さい敵を投げ飛ばす技だからね。ウオントやクラブマンは重いから持ち上げるの大変だよ。」

「…ならば、私が協力しよう。……いくぞ！！」

「ちょ、ミラ？！」

ミラはリンクアーツを使おうとして、クラブマンに突っ込んでいった。

私も慌てて後を追う。

ミラはクラブマンにウィンドカッターを使い攻撃しながら空中に放り投げる。

そこにジャンプした私が待ち構え、両手を握りしめて振り下ろした。

「風刃碎落撃!!」

クラブマンは地面にめり込みながら、倒れた。

ジュードとアルヴィンも最後のクラブマンを倒したようだ。

「よし、終了!!」

「うむ、いい修行になった。」

「これで依頼達成だね。早く戻ろう。」

「それじゃあ海停へレッツらゴー!!」

私達はイラート海停へと戻った。

海停に戻り、女性から報酬を貰って宿屋に向かう途中、ミラが崩れる様に倒れる。

「「ミラ?!」」

私達はミラの容態をチェックしていく。

「熱はない…」

「脈拍、呼吸も異常なし…」

「ミラ、どんな感じ？」

ジュードが聞くと

「……力がいらない…」

……グウー！！！！

ミラが答えた瞬間、盛大にお腹がなった。

……成る程、病名は空腹、と…

「お腹空いたんだね…ちゃんとご飯食べてる？」

「……食べた事はない…」

ミラは答える。

……え？今まで一度も？

「マジで？……じゃあどうやって栄養取ってたの？」

「ウンディーネから水の生命子を…シルフから風の生命子を…」

……つまりは四大精霊達から栄養を貰ってたのか。……何処まで
四大頼りなんだ、一体…

「あのー、この人は何を言ってるの？」

アルヴィンが不思議そうに聞いてくる。まあ、確かに聞きたくもなるわな……。

「つまり精霊の力で栄養を取ってたって事。でも、これからちゃんとご飯を食べないかね。」

「じゃ、急いで宿屋にレッツらゴー!!」

私達は宿屋へと急いだ。

宿屋に着き、フロントの男性に話し掛ける。

「いらっしやい。」

「四人だ。とりあえず、先に食事になりたいんだが……」

アルヴィンがそう聞くと男性は申し訳なさそうな顔をして言った。

「すみません…今、料理人が居ないんですよ。」

それを聞いて、ミラはがっくりとうなだれる。

「ちょ、お連れの方大丈夫かい？」

私はジュードを見る。ジュードも同じ考えらしく、お互い頷きあう。

「あの…よければ厨房を貸していただけませんか？」

「お願いします。」

私とジュードは男性に頼み込む。

「まあ、お連れさんもぶっ倒れそうだし…いいよ。好きに使いな。」

「ありがとうございます！」

私達はお礼を言って厨房へと向かう。

「お腹と背中がくつつく…ありえない事だが、体験すると、これがいかに適切な表現かがわかるな…フフ、フフ…」

ミラの呟きを聞き、急いで厨房へ行き、料理を始めた。

それから少し経ち、。私達は作った料理を並べて食べ始める。

ミラは物凄い勢いで料理を平らげていく。余裕持たせるために六人分作ったのに、もう無くなりそう…。

「お、美味しいな。」

「それだ！食事というのは、中々楽しい。人間はもっと、こういうたものを大切にすればよいのだ。」

ミラは優しい顔でそう呟いた。

その後、満腹になったミラはテーブルに突っ伏して爆睡している。

「……きつと、寝るのも初めてなんだね。」

「だろうね。ビックリしちゃったよ、何も食べた事ないって聞いた時は。」

私達は寝ているミラを見ながら話す。

「……ところで、このお嬢さんは何者？何か、人間離れしてるよな。」
アルヴィンがミラについて聞いてくる。

「……マクスウェルなんだって、ミラは。」

「マクスウェル?!あの四大精霊を従える、精霊の主マクスウェル?」

「みたいだよ。自分で言ってたし、私達は実際に四大精霊を呼び出すとこ見たし。」

始め自分達が言っているのかと思ったが、ミラ自身から堂々と言っていたから問題はないだろう。……多分。

「アニキ、ミラを部屋に連れてくね。このままだと風邪引くし、それに私も疲れたから先に寝るよ。」

「わかった。それじゃ、おやすみ。テスラ。」

「おやすみ、二人とも。」

ミラを背負い、二人に挨拶してから私は自分とミラが泊まる部屋へ

と向かった……

四話：異国の地、共鳴の力（後書き）

感想、意見待ってます！

五話…旅立ち、果実の村（前書き）

歌って歌詞書いたら著作権とかの問題でまずいかな……と思い、「
♪」だけにしていきます…。

五話…旅立ち、果実の村

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

私は今、西の湖でひとり、歌を歌っている。

朝早くに目が覚めてしまった私は、まだ誰も起きていないからと、気分転換に散歩に出た。

その後、この湖に来て、人がいない事を確認して歌っている。

え、何で人がいない所で歌うかって？

だって恥ずかしいじゃん。上手いワケじゃないのに…。それに私が歌うのは前居た世界の歌がほとんどだから、何か聞かれた時の対応が面倒だし。

「♪♪♪♪♪♪…ふう、久々に歌ったな。さて、そろそろ戻りますか。」

私は宿屋へと戻っていった。

「おはようミラ、アルヴィン。」

私は宿屋に戻り、入口近くにいたミラとアルヴィンに挨拶した。

「おはよう。一体何処に行ってたのだ、テスラ？突然居なくなるからビックリしたぞ。」

「全くだ。誘拐されたかと思ったぜ。」

ミラとアルヴィンに心配をかけてしまったようで私はすぐに謝る。

「ごめん…ちょっと散歩に行ってたの。」

「だったら一言言えよな。」

「皆、寝てたから起こすのも悪いと思って…」

そう話していると、ジュードも起きてきた。

「おはよう、皆。」

「おはよう、アニキ。」

「おはよう、ジュード。ちょうどよかった。早速だが、二人に話がある。」

ミラはそう言って、私達に視線を向ける。

「ジュード、テスラ。私はこれから、ニ・アケリアに帰ろうと思う。」

「ニ・アケリア……そこにミラは住んでるの？」

「正確には祀られている。」

祀られてるって……精霊の主とは言え、仏像じゃないんだから…

「そこに帰れば、四大を再召喚出来るかもしれない。」

「マジでマクスウェルなのか……」

アルヴィンが驚いた感じで呟いている。昨日、話したハズだけど……まあ、無理もないわな。

「そこでだ、二人とも。私と一緒にニ・アケリアに来ないか？」

「「えっ？」」

私とジュードの反応がシンクロする。

「君達の状況は“身から出た錆”というものだが、その責任は私にある。ニアケリアの者達に私が口添えしよう。きっと君達の面倒を見してくれるハズだ。」

「へえ、以外に考えてんのな。」

アルヴィンが聞くと

「お前に“他人事”と言われてから、私なりに考えた結果だ。」

何か色々と凄すぎるよ、ミラ。

「……わかった。僕はミラと一緒に行くよ。」

「そうか。テスラは？」

（…世話になるつもりはないけど、ニ・アケリアには行ってみたいし）

「うん、私も行く。」

「じゃ、話もまとまったようだし出発する前に準備済ましとけよ。」

と、アルヴィンがまとめる。……あれ？

「アルヴィンも一緒に行くの？」

「ニ・アケリアに着けば報酬が貰える話だしな。それにまだ剣の稽古終わってないし。」

「すまないな、アルヴィン。」

「いいって事よ。そんなじゃ、準備出来たら街道入口に集合な。」

そう言ってアルヴィンは先に出ていった。

――
私達は準備を終え、街道入口に集合していた。

「ところで、ニ・アケリアまでどのくらいかかるの？」

「うむ、シルフの力で飛べば一時間といった所か。」

ミラ、全然答えになってないよ……それにシルフでも一時間って、かなり長い距離じゃ……

「途中で休める場所があるといいがな。」

アルヴィンがそう言う

「確か、この先に村があるって地図には書いてあったよ。」

「なら、今日中には着くといいな。」

「それじゃ、まずはその村目指してレッツらゴー!」

私達は街道へ歩き出した。

――歩いてから約20分、ミラは少し疲れたようだ。

「ふう……歩くというのは、中々大変だな。脚が太くなってしまいそうだよ。」

「ミラって、案外お嬢様なんだね。」

「お嬢様などではないが、普段はシルフの力で空を飛んで移動していたのでな。歩くのは……ウンディーネと水面を散歩する時ぐらか……」

ミラは何でもないように話す。

「……それは、お嬢様でも無理だね。」

「いや、ある意味お嬢様でしょ。スケールが大き過ぎるだけで……」

「というか、四大精霊をこき使って、後で罰が当たっても知らないぜ?」

アルヴィンは呆れたように言う。だが……

「なに、力はあるが口煩い小姑のようなものだ。いつまで経っても私を子供扱いする。……全く困ったものだ。」

ミラは途中から怒った様に話す。

「四大精霊を……」

「小姑呼ばわりかよ……」

「普通出来ないって……」

そんなやり取りをしたり、魔物を倒したりしながら先へと進んだ。そして進む事約三時間。ようやくその村に着いた。

「果物のいい匂いがするね。」

「酒の匂いもな。果樹園でもやってるんじゃないか。」

話をしていると、一人のお婆さんが近づいてきた。

「これはこれは、このハ・ミルの村に旅人が来るなんて何年ぶりじやろな。」

「お婆さんは村の人なの？」

「村長をやっておりますじゃ。」

なるほど、村長さんか……

「ニ・アケリアへ向かう道はここで合っているか？」

ミラが村長さんに聞くと、村長さんは驚いた顔をした。

「ニ・アケリア……これはまた懐かしい名を……」

「どゆこと？村長さん。」

私が聞くと、

「忘れられた村の名じゃ。わしが小さい頃、キジル海瀑の先にあると聞いた事があるがの……」

「キジル海瀑？」

「大きな滝の事ですじゃ。起伏も激しく、越えたとしたら大変じゃぞ。」

今日中に越えるのはどうやら無理そうだ。

ミラも疲れてるし、何より時間的にもう夕方だ。（暁域だから昼夜わかりにくいけど……）

「なら、今日はここで休んで明日出発しようぜ。」

話が決まると村長さんが宿屋がないからと、自分の家の部屋を貸してくれた。優しい人でよかった……。

その後はハ・ミルの村を見て回ったり、道具の補充をしたり、アイフリードの宝を見つけたり、ミラが食に目覚めて涎が止まらなくなったり……途中おかしくなったがまあ、色々やってから村長さんの

家で眠りについた。
そして次の日の朝……

私は部屋で一人、体操をしている。ミラは既に起きて外に出たよう
だ。

……え、何で体操してるのか？………バストアップの体操をして
るんだよ！文句あるか？！

私は胸が小さいんだよ…ミラよりも、幼なじみの女の子よりも……
（涙）

だから去年から毎日やってるんだよ。

効果？……まだ出てないけど何か？（怒）

コンコン。

「テスラ、まだ居るのか？そろそろ出発するぞ。」

「アルヴィン！わ、わかった、すぐ行く！」

「急げよ。」

び、びびった…じゃない、早く行かないと。

私は外へと急いだ。

「おはよ…ッ?!ラ・シュガル兵?!」

私が来た時、村の入口にラ・シュガル兵が見えた。

「もう追っ手がくるとはな…」

「にしては早過ぎるような……」

「とにかく、急いで村を出るぞ。」

ミラがそう言い、私達は村の奥へと向かう。

「……もう兵士がいる。」

「……出口をふさがれたね。」

海瀑へと続く道は既にラ・シュガル兵がふさいでいた。

「どうするよ?」

「このまま、正面から突破するしかあるまい。」

「そうだね。これ以上兵士が来る前に倒した方がいいね。」

ミラとジュードはそう言い、方針が決まる。

「短い作戦会議だ事……」

「そもそも作戦でもないような……」

私とアルヴィンはそう感想を漏らし、ミラ達の後をついていく。

と、背後から人の気配がしたので振り返ると、そこにはぬいぐるみを抱えた少女が立っていた。

「あの…何してる…ですか？」

少女は途切れ途切れの言葉で聞いてきた。

「うむ。邪魔な兵士をどうやって突破しようか考えていた所だ。」

ミラ…こんな小さい子にはつきり言いすぎだよ…

「あの兵隊さん…邪魔…なんです…ね。」

少女はそう言って、抱えているぬいぐるみに視線を落とす。すると
……

ボヨヨヨーン！

そんな効果音が聞こえてきそうな勢いでぬいぐるみの目と口がひらき、フワフワと浮かびだした。

な、なんじゃこりゃ？！危うく叫びそうになった…。みんなを見ると、やっぱり驚いてる…。

「ん？…ヒィ？！な…なんだ？！」

「こ…こっち来るな？！」

ぬいぐるみが兵士に向かっていき、それを見た兵士がパニックになっている。

…まあ、普通はそうなるよね。まさしく“未知との遭遇”…。

「娘っ子。こんな所で何をしている？あれ程小屋から出るなと言うに。」

声がした方を見ると、身長二メートルはありそうなオッサンがいた。い、いつの間に……と言うか、デカすぎだろ…

「む…ラ・シュガルもんが！勝手な真似を！！」

そう言ってオッサンは兵士に近づき、大槌で吹き飛ばしてしまった。すると少女は、村の入口の方へぬいぐるみと一緒に走って行った。

「全く…む？娘っ子はどこへ行った？」

「あの子なら村の入口の方へ…」

「なんじゃと?! いかん!」

オッサンは急いで入口へと向かって行った。

「……何と言うか、どうにかなったね。」

「とにかく急ぐぞ。」

私達はハ・ミルの村から急いで出ていった。

五話：旅立ち、果実の村（後書き）

歌う曲はやはりテイルズの曲です。

六話…襲撃、謎の声（前書き）

オリジナル共鳴術技って、考えるの大変ですね…（特に名前が…）

六話…襲撃、謎の声

私達は今、キジル海瀑の入口に来ている。キジル海瀑は淹って言うてたけど…どう見ても海にしか見えない…。

「ラ・シュガル兵も追って来ないようだし、急がなくても大丈夫そうだぜ。」

アルヴィンはそう言って、歩みを止めた。

「ハ・ミルの人達に悪いことしちゃったな…とても良くしてくれたのに…」

（確かにそうだよ…でもあのまま捕まるのはまずいし…）

「ラ・シュガル兵が居たんだ、仕方ねえよ。“逃げるが勝ち”ってな。」

「ハ・ミルの者達が決めた事だ。」

二人はそう言って先へ進もうとする。

「でも…僕達を助けようとしてくれたのかもしれないのに…」

「まあ、ね…良心が痛むよ…」

「ならばジュード、テスラ。君達はハ・ミルに戻るといい。短い間だったが、世話になった。」

そう言っミラは先へ行こうとする。
ミラ……いくら何でもその言い方は…

「……何でいつもそうなの?!」
ジュードがミラに怒った様に叫ぶ。

「君達は私にもっと感傷的になれと言ってるのか?」

「うーん、そう言う事かな……多分。」
私が答えると

「それは難しいな、君達の言葉にもあるだろう。“感傷に浸っている暇はない”とな。」

どこかで聞いた事ある台詞を言うミラ。

「……それは使命があるから?」

「そうだ。」

「何かを成し遂げるには感傷的になっちゃいけないの?」

ジュードはミラにそう聞く。

「君達は感傷的になっても成すべき事を成せるものなのか?」

「わからないよ……そんなの…」

「やってみないと何とも…」

「ならばやってみたらどうだ。」

私達は“え？”とミラを見る。

「君達の成すべき事を、そのままの君達で……そうすれば答えが出るかもしれない。」

「僕の成すべき事……」

「なるほど……確かにね。よし！やったるぞー！」

「……テスラは何か成すべき事あるの？」

「……………あ（汗）」

私はジュードに言われて考え込む。

「……でも、自分自身がどうしたいかだから、すぐに決める事ないと思うよ。考えや在り方は人それぞれだしさ。」

私はそう言ったがジュードはまだ考え込んでいる。

「テスラの言うとおりだぜ、優等生。」

「……アルヴィンは成すべき事、あるの？」

「…さあ、どうだろうな。」

アルヴィンはジュードの質問をはぐらかすように答える。

「“ある”って言ったらジュード君また悩むだろ？“僕も早く決め

なきやゝ“って。”

(た、確かに…)

その後、私達はミラと行動すると決め、先へと進んだ。

魔物を退けながら、私達はキジル海瀑の中腹辺りまできた。そこにはとても大きな滝が見える。

「ニ・アケリアかゝ。どんな所なんだろう、いい所なの？」

ジュードがミラに質問する。

「ああ、私は気に入っている。瞑想すると力が研ぎ澄まされる気がする。落ち着ける場所だ。」

「へえゝ…というか、瞑想っていつもやってるの？」
私が聞くと、

「ああ、前までは一日中やっていたな。」

「いや、それやり過ぎ!!」
思わずツッコんでしまった。

「そろそろ休憩しねえか？岩場続きで足痛てー。」

「ついてから休めば良いだろう？」

「大丈夫だって、ニ・アケリアは逃げねーよ。」

そう言ってジュードの首に腕をかけながら

「なあ、休もうぜ？ジュード君。」

ジュードに同意を求める。

（ああなるとアニキは拒否できない性格だからな……）考えは的中し、

「う……うん、そう、だね。少し休もう。」

（やっぱり……）

その後、ミラも渋々休憩を認めて、一度みんなバラバラになる。

私は滝を背に、目の前に広がる景色を楽しんでいる。ジュードはアルヴィンと男の会話？みたい。

「綺麗だ……ッ?!」

そんな感想を漏らしていると、突然頭痛が私を襲う。それと同時に細かい声が、頭に響く様に聞こえる。

『……た………て……』

「な……なん、なの……一体?……」

『……滝………裏……』

「滝の、裏……?」

そう呟いた瞬間、後からミラのうめき声が聞こえてハッ、とする。途端に頭痛が引き後を向くと、ミラが何かの術に捕われた。すぐ隣には、術を使った人物が佇んでいる。

術を使った人物は女性で、かなりグラマーな青いスーツを着ていて、尻尾？がある。

しかも何か胸がでかいし……羨ましいとか思っていないからね？！

するとジュードとアルヴィンも駆け付けてきた。

「……今はこの娘にご執心なのね？」

女性はアルヴィンを睨みつけそう言った。……知り合い？

「放してくれよ。何の用か知らないが、そいつは俺の大切な雇い主^{ひと}なんだ。」

アルヴィンが険しい顔でそう言い放つ。

「近づかないで。どうなっても知らないわよ。」

(明らかにこっちが不利だ……ミラを助けるにはどうすれば……)

隣を見ると、ジュードがこめかみに指を当てて何か考えている。

「……アルヴィン、テスラ、そのままで聞いて。」

抑えた声でジュードが話し掛ける。

「アルヴィン。あの右上の岩、打てる？……ミラを助けられるかもしれないんだ。」

視線の先にはどこか不自然に出っ張る岩があった。アルヴィンは銃を構えて聞く。

「……すぐ撃っていいのか？」

「……うん！」

「アラ、この娘を見捨てるつもり？ 酷い人……」

そう女性が言った後、アルヴィンは岩に向かって二、三発撃った。

弾が当たって少しすると、その岩が突然動き出して女性の方へと飛び掛かってきた。ミラは女性が驚いた時に拘束から解放され、女性は岩に擬態した魔物に吹き飛ばされる。

「ミラ、無事?!」

「ああ、だが今はこの魔物を何とかしなければ……」

「話してるヒマないぜ、いくぞ！」

私達は魔物……グレーターデモッシュに向かって走りだす。

魔物はかなり興奮している。まあ、休息を邪魔されたら誰でも怒るわな……

ジュード達三人は魔物に近づくが、私は弱点を調べるために少し離れて術を使う。

「大地よ叫べ……ロックトライ！」

槍の様に地面が勢いよく突き出る。だが、命中しても魔物はびくともしない。

「地属性は違うか……だとしたら、ここの魔物達と同じ……」

そう考えた私はすぐに詠唱に入る。

「炎よ弾けろ…ファイアーボール！」

火の玉が魔物に飛んでいき、当たった瞬間魔物は悲鳴を上げて怯む。

「皆、こいつは火属性が弱点だよ！」

「そうか…！？！危ないテスラ！！」

ミラがそう言った途端、魔物が私に水を放射してきた。

「ぶあ？！」

私は咄嗟に防御するが、あまりの勢いに吹っ飛ばされる。だがすぐに体制を立て直し、着地した。

「テスラ、大丈夫？！」

「大丈夫！それよりアニキ、リンクしよう！」

私はそう言い、ジュードとリンクし、リンクアーツを発動する。

ジュードは巻空旋を放ち、魔物を上空に飛ばす。私はジャンプして、魔物にむけてファイアーボールを放つ。

「「エアリアルファイア！！」」

魔物は吹き飛び裏返しになり、さっきまで岩で隠れていた本体がまる見えになる。

「アルヴィン、やるぞ！」

「OK、ミラ様！」

ミラはファイアーボールを放つ。だがそれは魔物ではなく、アルヴィンの剣に当たって剣は炎を纏った状態になる。
アルヴィンはそのまま虎牙破斬を喰らわせ、最後に纏った炎を魔物に放つ。

「燃え尽きろ！紅蓮剣！！」

かなりのダメージを与えたはずだが、魔物はまだこちらに向かってくる。

「あれだけ喰らってもまだ…」

「でも、もう少しだよ！」

その時、魔物は地面に触手を突っ込ませた。

「何する気だ？」

アルヴィンは魔物の出方を伺いその場で動かずにいる。
ふと、彼の足元をみる。すると何かがちらっと見える。あれは……
あの魔物の触手？！

「アルヴィン走って！触手がくる！！」

「何?!」

アルヴィンは咄嗟に走り出す。瞬間、アルヴィンがいた場所から触手が槍の様に突き出る。さらに……

「追いかけてきやがる?!」

アルヴィンを追跡する様に触手は次々と突き出てくる。

「ミラ、リンクして!この一撃で決めるよ!」

「ああ、行くぞ!」

私とミラはリンクしてリンクアーツを発動させる。

「集いし炎よ…」

「燃え広がれ!」

「「バーストライク!!」」

術を発動した瞬間、大きな炎の塊が飛んできて、魔物に当たる。

ギイイイイー!!!

魔物は悲鳴を上げながら、ゆっくりと倒れていった。

「ハア、ハア、…皆無事か?」

ミラが私達に聞く。

「ハア、ハア、だ、大丈夫…」

「私も：ハア、ハア：」

「オ、オレは、まずいかも……」

アルヴィンは立ってはいるがかなりキツイ様子だ。……確かにさっきまで触手から逃げるために全力疾走してたからな…

「魔物が岩に擬態していたとはな…よく気付いたな。」

「魔物が君達に襲い掛かっていたらどうするつもりだったのだ？」

ミラがそう聞くと

「それでもよかったんだ。そうなれば、あの位置からアルヴィンは死角になるからね。」

(さすがアニキ……相変わらずの頭脳回転力……)

「あの短時間でそこまで考えてたのか。」

「大したものだ。誰にでも出来る事ではない。」

アルヴィンもミラもジュードを褒めた。

「僕にしか出来ない事………ありがとう。」

ジュードは少し照れながらそう言った。

「それじゃ、ニ・アケリア目指して再出ば…ッ?!」

言った瞬間、あの頭痛が再び私を襲う。あまりの痛さに私はその場にうずくまる。

「テスラ?! 大丈夫?!」

皆が私を心配して側によるが、今の私には返事をする余裕がない。

『た……て……たす……て……』

再びあのか細い声が聞こえた。

「何、なの……一体……何が……」

すると突然、滝の裏から水で出来た触手が出てきて、私達を捕らえる。

「な……何これ?!」

「くっ?! 放せ!!」

「何なんだ、一体?!」

「わあああああ?!!」

私達は水の触手に、滝の裏にあった穴に引きずり込まれていった……。

六話：襲撃、謎の声（後書き）

次の話はオリジナルです。

感想や意見、待ってます！

七話：不思議な宝石（前書き）

オリジナル展開は難しい事を思い知らされました：

七話…不思議な宝石

「う……ううん」

私は、目を覚ます。そこには自分を心配そうに見つめるジュードがいた。

「あれ……アニキ……」

「よかった！目を覚まして……大丈夫？怪我はない？頭痛はまだ続く？」

ジュードに質問責めに困惑しながらも答えていく。

「あ……うん、大丈夫。頭痛も引いたし……それより、一体何があったの？というか、ここどこ？」

私の質問に答えたのはアルヴィンだった。

「どうやらここは滝の下にある洞窟みたいだぜ。お前が頭痛を起した後、変な水の触手に引きずり込まれたんだ。」

そういえばちらっと見えたな……と思い返す。

「それじゃ、早く入った所から出よう。」

「それが……無理なのだ。」

ミラがそう言った。

「何で？」

そう聞くと皆、上を指差した。

上を見ると、遥か上空…二百メートルぐらいの所に私達が入ったであらう穴が見えた。

しかも壁は垂直で結構つるつるだからよじ登るのは不可能…

「……確かに無理だわ…」

「とりあえず奥に続いているから、テスラが起きてから進むって話になったわけだ。」

成る程、そうだったのか。

「じゃあ、私は大丈夫だし、奥へ行こう。」

私達は奥へと進んでいった。

洞窟は一本道で迷う事はなかった。

魔物に遭遇する事もなく、逆に不気味な感じがする。

「……全然魔物に遭わない…」

「楽だからいいんじゃない？」

「確かにそうだけど……普通ならバット系の魔物とかいるハズなのに…」

（それに、何だか胸騒ぎがする…）

しばらく歩くと広い空間にでる。奥には、大きな像が壁にはめ込まれているように鎮座していた。

「ここは何なのだ？」

「昔の人達が信仰の場にしてたのかな？」

「にしても、随分不気味な像だな…」

その巨像は兵士の姿を摸していて、全身は鈍く銀色に光っている。両手は大振りの剣の形をしていて、今にも切り掛かってきそうだ。
「何か今にも襲ってきそう……ッ?!」

あの頭痛がまた私を襲う。だがあの時と違い、痛みは一瞬だけで、声も少しハッキリしていた。

『助け………助けて………』

(助けて…? どういう…)

その時、

ガゴン!!

私達を通った道が閉ざさ、私達は閉じ込められる。さらに…

ブウン!!

ゴゴゴゴゴ…

壁にはめ込まれた巨像の瞳にあたる部分が光り、動き出した。

「像が動いた?!」

「くそっ、罠か?!」

「とにかくやるぞ!!」

私達は巨像に向かって攻撃を始める。

巨像は動きが少し遅いが、物凄い力で剣を振り回してくる。掠っただけでも死んでしまいそうだ。

「くっ…!!」

「テスラ、リンクして!!」

「わかった!!」

「アルヴィン! 少しの間、あいつの注意を引いて!!」

「少しだけだぞ?!」

そう言いながら、アルヴィンは銃を使い、巨像の注意を引き付ける。その隙に、私はジュードとリンクして素早く像の足元にくる。そして、私達は向かい合うように立ち、同時に掌底破を繰り出す。

「「掌底対蓮!!」」

右足がリンクアーツを受けて粉々に碎ける。巨像はバランスを崩し、後ろ向きに倒れていった。

「よっしゃ！ やったねアニキ！」

「案外脆いんだな、この像……」

アルヴィンはそう言ってゆっくりと構えを解く。が……

「……………ッ?! 構えろ!!」

「どうしたの、ミラ……な?!」

「何……ゲ?!」

巨像を見ると、壊したハズの右足がみるみる再生して、元の形に戻っていく。

「再生するのかよ?!」

「確かこう言うのって、何かコア見たいなの壊すか抜くかすれば止まるんだよね?」

「そのコアと言うのはどこだ?」

「わかんないから探すの!……って、おわ?!」

再生し終えた巨像が剣を振り下ろしてきたので走って避ける。私達がいいた所は地面がえぐれ、岩は粉々になる。

「あ、危ねえ…」

「……あ！皆、像の胸元を見て！」

ジュードに言われた通りに見ると、胸元にうつすらと青色に輝く宝石の様な石がはめ込まれていた。

「あれがきつとコアだよ！」

「よし、そうとわかりや…」

アルヴィンは銃を宝石にむけて放つ。だが……

バチィ！！

宝石に届く前に何かに弾かれてしまう。

「障壁が張ってあるのか?!」

「このままじゃ、像を止められない…」

（どうすりゃ……ッ?!なんでこんな時に……）

またあの声が聞こえる。

『障壁……炎……共鳴……破壊……』

（炎、共鳴……火属性のリンクアーツ?!）

『助けて……』

（あんたは一体誰なんだ？それに助けて、って…）

私はまさか、と思い宝石を見た。

宝石はまるで“正解”と言うように、一回光った。

（あの宝石が……？いや、そんな……でも…）

“何もない空間で卵がひとりでに潰れた時、原因は卵の中にある“

ハオの卵理論……ありえない事でも、他に可能性がなければ真実になりえる……あの宝石は私に助けを求めているんだ。

なら、私がやる事は一つ、あの宝石を助け出す事だ。宝石を助けるって何か変な感じするけど…

「アニキ、ミラ、アルヴィン……作戦を思い付いたから、協力してもらえないかな？」

私は攻撃を避けながら、ジュード達に協力を頼んでみる。

「……という感じ何だけど。」

「けど、それってかなり危なくない？」

「火属性で壊せるかも、って確証ないのにやるのもなあ…」

ジュードとアルヴィンは乗り気ではない。

それもそうだろう。私はあの声が真実を言っている事前提の作戦を立てたのだから。

作戦はシンプルだ。

まずジュードとアルヴィンが先に仕掛けて、巨像の両腕を破壊する。破壊した直後、すかさずリンクした私とミラが火属性のリンクアーツで障壁を破り、宝石を外して巨像を止める、というものだ。

あの声の言葉が嘘なら、私は真っ先にやられてしまうだろう。

それでも、私はあの言葉は嘘ではないように感じる。根拠はないけど…。

（それに、他に方法がないからね。今のところ…）

するとミラが口を開く。

「……いいだろう、協力するぞ。」

「ミラ?!」

「今の私達には他に方法がない。それに、テスラは何か確信を持っているようだしな。」

私はミラを見てゆっくりと頷く。

「……わかった。でも危なくなったらすぐにやめさせるからね。」

「へいへい…やればいいんだろ。ま、雇い主の意志には添わなくちやいけないからな。」

ジュードは心配しながら、アルヴィンはチャージしながら私の作戦に乗ってくれた。

「……ありがとう、みんな。」

そして、私達は巨像に向き直る。
先頭にジュードとアルヴィンが、二人の間の一つ後にリンクした私
とミラが立つ。

「……それじゃ、作戦開始!!」

私達は一斉に走り出す。巨像の剣を避けながら、ジュードとアルヴィンは同時に技をだす。

「掌底破!」

「虎牙連斬!」

攻撃を受けた巨像は両腕を失う。再生する前に、私はミラに合図を送る。

「ミラ!」

「やるぞ!」

ミラはファイアーボールを放つ。それは私の腕に宿り、炎を揺らめかせる。

私は自分のマナを腕に集め、炎をさらに大きくしながら幻竜拳を寶石を守る障壁へぶつけた。

「「火炎竜拳!!」」

障壁とリンクアーツがぶつかり合い、火花が散る。

「うおおおおお！！」

私は靈力野をフル稼働させ、ありったけのマナを自分の腕へと注ぎ込む。

ピシ……ピシ…バアアアン！！

障壁が破られ、私は宝石を掴む。そして……

「おりやああああ！！」

バチン！！

宝石を外す事ができた。巨像も宝石を外された事で動きが止まり、ガラガラと崩れていった。

「やったー！！……ってアララ？」

私は目眩がしてフラフラと地面にへたりこむ。

「テスラ、どうしたの？！大丈夫？！」

ジュードがものすごく心配しながら聞いてきた。

「大丈夫、大丈夫。ちょっと靈力野に負担かけすぎただけだから…」

「にしても、作戦が上手くいってよかったな。失敗してたらお前、真っ先に死んでたぜ？」

「だが、成功したのだからよいではないか。」

みんなと話しながら、私は手に持つ宝石を見ていた。

宝石は淡い青色をしていて、花の蕾の様な形をしている。

（ちゃんと……、助けられたよ。）

私は心の中でそう呟いた。その時…

コオオオォー！

宝石がまばゆく光り始める。

「何?!」

「宝石が…」

宝石は宙を浮き、蕾が開花する様に開いていく。そして、その中から青色の丸い宝玉が現れた。

「キレイ……」

青色の宝玉はそのまま上昇しながらスウ、と消えていった。

「……何だったんだ、一体…」

「でも、キレイだったね。」

「ああ、あれほどのモノは中々見られないからな。」

三人が話してる間、私は宝玉が消えた場所を見続けた。

（何だろ……私、あれを知ってる気がする。）

実際あれを見たのは初めてだが、何故か知ってる感覚があるのだ。

何でなのかを考えていたが、ジュードに声をかけられ中断する。

「像があつた場所に奥に続く通路があつたんだ。早く行こう。」

「……そうだね。じゃ、レッツらゴー！」

（まあ、いつか思い出すだろう）と楽観的に考え、私はみんなと奥へと進んだ。

——私達が去った後、何かがうつすらと現れる。ぼんやりと朧げにしか見えないが、青い髪をした少女の出で立ちである。

「……………さま…」

少女は悲しそうに呟き、そして消えていった。

水面が辺り一面を覆い、空を映し出している。辺りには輪の形をした何かがゆつくりと回っている。おそらく、どんなに探しても、まず見つける事ができないだろう空間に、声がこだまする。

「……………の封…が破ら……………一…誰が…」

遠くに居るためよくは聞こえないが、人間でいえば若くても六十代以上の声だ。

「だ…問…ない…………あや…は…………いない…」

声の主は何やら自分に言い聞かせるように呟く。

「……………恐れ…………足…ず」

その後、声が聞こえる事はなかった……。

七話：不思議な宝石（後書き）

次はいよいよニ・アケリアです。あの巫女殿も出てきます。

八話…精霊の里、決意（前書き）

中々話が進まず申し訳ありません…

八話…精霊の里、決意

洞窟を抜けると、ちょうど滝の上に出た。

私達はそのまま進み、ニ・アケリアに到着した。

ここがニ・アケリア……思ってたより普通だ、と失礼な事を考えてしまった。

イヤ、精霊の里だから精霊が常に見えるのかと思って…

「ここがニ・アケリア…」

「案外普通の村だな…」

ジュードとアルヴィンも同じ事を考えてたらしい。

ミラは村の入口近くにいた老人に話し掛ける。

「すまない。イバルはどこにいる？」

「イバルならマクスウェル様を探しに村を出たが……」

老人が振り返り、ミラを見た瞬間、

「マ、マクスウェル様?!」

「うむ、今戻った。」

ミラに向き直り、お祈りをする様なポーズをしてうやうやしく頭を下げた。他の村人も、ミラの近くまで来て同じポーズを始める。

「……スゲェー……」

「ミラってすごいんだね。」

「オレ、結構疑ってたんだがな……」

私達は各々の感想を呟く。

「わわ、私の様な者にお声を掛けて下さるなんて……」

「普通にしていればよい。イバルはいないのか？」

「は、はい！いつもより帰りが遅いと心配して……」

「そうか、相変わらず短気な奴だ……すまないな、手を止めさて。」

話し終えた後、ミラは村の奥へと歩き出す。

「私はこれから社へ向かい、四大の再召喚の儀式を行う。そこで君達には、村の四つの祠にある世精石よしょうせきを運んでほしい。」

「それが儀式に必要なんだね。」

「ああ、巫子が不在で、頼めるのは君達しかないんだ。」

「村人に頼めばいいんじゃないか？」

アルヴィンはそう言うが

「村の者達の反応を見ただろう？ 普段私と関わりがあるのは巫子ぐらいだ。あれでは話どころではない。」

確かに……ちよつと話すとおんな状態になるんだから、無理だろうなあ。

実際、今も道行く人があのポーズしてるし……。

「わかった、僕達が運ぶよ。」

「こういうのは男の仕事だからな。」

「女だけど私も運ぶよー！」

そして私達はそれぞれ世精石を持って、ミラの社まで運んでいった。しばらく歩いていき、ミラの社に着いた。

「ミラは普段、ここに住んでるの？」

「住んでいる、と考えた事はないが…そうなるな。」

「何もない所だな。退屈とかしないのか？」

周りを見ると、確かに何も無い。

「私の使命においては何の問題もない。人間が記した書物を読んだりもするがな。」

「へえ」

「私は無理だわ…」

絶対出ていく…と考える私だった。

その後、社の中に入ってミラに言われた通りに世精石を置いていく。

「これでいいの？」

「ああ、助かった。」

そして、ミラは四大精霊の再召喚を試みる。

あの時の様に、両腕を広げて魔法陣を展開させる。だが……

ピシッ！ガラガラ…

「ッ?!」

突如世精石が崩れ、ミラは苦しそうにする。

「ミラ?!」

「大じよ…「ミラ様〜!!」ゲフ?!」

私が「大丈夫?!」と言おうとした途端、何者かに突き飛ばされる。見ると銀髪で褐色の肌をした少年がミラの前で膝を付いている。

「ミラ様、ご無事ですか?!」

「イバルか…」

イバル？ ああ、巫子って彼の事だったのか…。

「ミラ様、これは四元精来環の儀……何故、今この様な儀式を？…
…しかしこれは…」

イバルはおもむろに立ち上がる。

「イフリート様！ ウンディーネ様！！……ミラ様、これは一体…？
ミラはイバルにこれまでの経緯を話した。私達はミラ達の横で話を聞いている。

「……そのような事が…」

「んで、精霊を召喚できないって事は、そいつら死んだのか？」

アルヴィンがそう言うと、イバルは怒りながら話す。

「バカが！ 四大精霊が死ぬわけないだろ！！」

「……あれ、常識？」

アルヴィンが呟いた後、イバルが自信満々に説明し始める。

「大精霊は、微精霊同様死ぬと化石になる。だが、力は次の大精霊に受け継がれる！」

「…って言われてるね。」

「まだ誰も見た事ないけど。」

「ああ…」

アルヴィンは何か納得したように言う。

「ふん！存在は決して死なない幽世かくりよの住人、それが精霊だ！」

話が終わった後、ジュードはある考えを口にする。

「多分、四大達はあの装置に捕われたんじゃないかな？」

「うん、きっとそうだよ。」

私はジュードの考えに同意する。

「バカが！人間が四大精霊を捕らえられるワケがない！！」

「でも、死んでないのに主の呼びかけに応えないって事はそれしか考えられないよ。どんなにありえない事でも、ほかに方法がなければ事実になりえるんだ。」

「それに、その装置はマナを吸収する、精霊はマナの集合体。だからあの装置に吸収されて閉じ込められたと考えた方が自然だよ。」

「“何もない空間で卵がひとりでに潰れた場合、原因は卵の中にある”…ハオの卵理論か。さすがだな、優等生。」

「ぐぬぬぬ…」

イバルは悔しそうに顔を歪める。

「四大を捕らえるほどの黒匣だったとは……私はマクスウェルの力を失ったのだな……」

ミラがそう呟く。その顔はどこかはかなく私に映った。

「さあ、よそ者は去れ！ここは神聖な場所だ！ミラ様の世話をするのは巫子であるオレだ！！」

親指を自分に指し、ドヤ顔をしながら言い放つ。何気に歯がキラッと光った。

……コイツ、ぜってー友達にしたいくないタイプだな。

「……イバル、お前もだ。もう帰るといい。」

「……………は？」

「そうだな、有り体に言うぞ……“うるさい”」

イバルはその言葉を聞いた途端、ガーン！と効果音が聞こえそうな程ショックを受けていた。

まあ、あんなはつきりと言われたらなあ……でも、ある意味いい葉だ。その後、社の外でイバルに何か怒鳴られた私達。まあ、私は無視してたし、ジュードは何か考え事してて聞いてない見たいだ。イバルは怒鳴り終えた後村に帰り、アルヴィンも先に村へと戻っていき、社の前にいるのは私とジュードの二人だけになった。

「……どうする、アニキ。村に戻る？」

「……もう少しここにいろよ。テスラこそ早く戻ったら？」

「……私も、もう少しここにいる。」

そして少しの沈黙の後、ミラが社から出てきた。

「ミラ、どうしたの？すこし休むんじゃないの？」

「お前達こそ、村に戻らなかったのか？」

「テスラと話をしたんだ。」

「ならば、村人に君達の事を頼みに行くでしょう。」

ミラがそう言って村に戻ろうと歩き出すが、ジュードは俯いたまま
でいる。私もその場に立ったままだ。

「どうした二人とも。村に馴染めるか心配なのか？」

「……ミラはこれからどうするの？」

「またイル・ファンに戻って、クルスニクの槍を破壊しに行くつもり？」

「そうだ。あの装置はおそらく、マナを吸収してエネルギーにする
兵器なのだろう。あれがすぐに使われる事はないだろうが、奴らの
マナ確保はこれからも続く。使用される前に、何としても破壊しな
くてはいけない。」

「でも、ミラは四大の力を失ってる。壊すどころか、自分が死んじ
やうかもしれないんだよ。」

「だが、やらねばなるまい。もう決めた事だ。」

ミラはキツパリと言った。

「……ミラは強いね……」

「うん……」

私とジュードはお互いを見つめる。見ただけでお互いが同じ事を考えいた事がわかった。私達は頷き合い、そして……

「「ミラ、僕（私）達も一緒に行きたい……ミラの力になりたいんだ。」」

ミラにそう告げた。

ミラはいきなりの事で反応が遅れたが私達に聞く。

「だがジュード、テスラ、君達は私に関わって今までの生活を失ったのだぞ？後悔していないのか？」

先にジュードが答えた。

「後悔してない、って言ったら嘘になるけど……後悔しても何も戻らない。なら、今自分に出来る事……ミラの手伝いをしようかな、って。」

「私もアニキと同じ。……それに、あの装置を私も壊したいんだ。私が住む国でこんな事やるなんて、一国民としては何としても止めさせたいしね。」

それぞれの理由を言い言い終わった後、ミラがフ、と笑って

「君達は本当にお節介だな。」

と私達に向けて言った。

「そ、そうかな…」

「アニキは昔からだよ。私はアニキのが移ったんだよ、きっと。」

私はジュードを見ながら言った。

「全く、君達を巻き込まないように後から出たのだから…」

「そうだったの？」

ジュードが少し驚いてミラに聞く。

「君達との短い旅の間に学んだ“気遣い”というやつだ。中々難しいな…」

ミラは考えながら言った。

「とにかく、一回村に戻ろう。君達に見つかって、急いで発つ意味が弱まったからな。」

「うん」

「そんじゃ、レッツらゴー！」

私達はニ・アケリアへと戻っていった。

八話：精霊の里、決意（後書き）

誤字や間違いがあればご報告よろしくお願ひします m
〔
m

九話：新たな旅立ち、動き出す陰謀（前書き）

ハイ、ようやくニ・アケリアから出発します。遅くてすみません…

九話：新たな旅立ち、動き出す陰謀

私達がニ・アケリアに戻ると、アルヴィンが入口の脇にいた。

「よ、遅かったな。ミラも一緒か。」

「うん（まあね）。」

同時に返事する私達。

「身の振り方、どうやら決めたみたいだな。」

「うん、僕とテスラはミラと一緒に行く事にしたよ。」

「おいおい、どんな心境の変化だ？ また後悔するかもしれないぜ？」

アルヴィンは驚いて聞いてくる。

「でも、僕が決めた事だから。」

「それによく言うじゃん。“何もしないで後悔するより、何かやった方がいい”って。」

「……まあ、おまえ達が決めたんだからいいんじゃないか。」

話が終わった後、ミラが何かを思い出してアルヴィンを見る。

「いかん、忘れるところだった。……アルヴィン、報酬についてなのだが……」

ああ……私もすっかり忘れてた。

「それなら、村のじいさんが払うってよ。」

「村の者が？」

「ああ、“マクスウェル様を守ってくれてありがとう”ってな。」

「長老だな……要らぬ事を……アルヴィン、それは私の報酬ではない。」

「ミラ様がじいさんに“サンキュ”って言えばいい話じゃねえか。」

「だが……」

まだ渋るミラにアルヴィンは言う。

「こう言うのは素直に受け取るもんだぜ？村の奴らだって、自分達の誇りがあるんだからよ。」

「そういうモノか？」

「そういうモノだよ。だが、いくら待っても全然戻って来ねーんだよ。」

「長老はおそらく集会所だろう。行ってみるぞ。」

ミラについて来て集会所に入ると、長老である老人が棚で何かを探していた。私達を見つけてアルヴィンに遅れて申し訳ない、と謝罪

した。

「構わぬ。それよりも、アルヴィンへの謝礼を用意していると聞いたぞ。」

「はい、私達はマクスウェル様の様に戦う事は無理ですが、少しでもお力になりたいと、以前村の者達と出し合ったお金があまして…」

…何かスゲーいい話だな…一人で感動している私。

「そうか…」

「な、俺の言った通だろ？」

「ではお前達の誇り、有り難く受け取ろう。」

アルヴィンは長老から報酬をもらった後、「それじゃ、縁があればまた会おうぜ。」と言って集会所から出ていく。

「……何か、あっけないね。」

「傭兵とはそう言うものなのだろう。……ではジュード、テスラ、私達も出発するぞ。」

「「うん（わかった）。」」

そう言った瞬間、勢いよく戸が開き、イバルが入ってきた。

「ミラ様！ また何処かに出掛けられるのですね？」

「ああ、また留守を頼むぞ、イバル。」

「自分もついて参ります！こんなどこの誰かも判らぬ者にミラ様を任せられません！！」

イバルは私達を指差し、そう叫ぶ。……あの時といい色々失礼だな、コイツ…。

「イバル……お前の使命を言ってみろ。」

「え…あ、自分の使命はミラ様の身のお世話をする事、です！」

自信満々で言うイバル。だが、ミラはイバルを睨みつけ、「それだけか？」と聞く。

イバルは何か言いづらそうにしてたが、

「……戦えないニアケリアの者達を守る事…です。」

と絞りだすように言った。

「旅の共はジュードとテスラがしてくれる。お前はもう一つの使命を果たすんだ。」

「しかし！こいつらのせいで精霊達は！！」

また私達を指差して叫ぶ。

「あれは私の落ち度だ。……それに二人がいなければ、私はニ・アケリアに帰る事は出来なかった。」

「「ミラ…」」

「しかし!!」

イバルはまだ何か言おうとするが……

「成すべき事を持ちながら、それを放棄するのか、イバル？」

ミラが怒ったように聞き、イバルは黙り込む。そして……

「……いえ…」

と悔しそうに言った。

「では行くぞ、二人とも。」

「あ、うん…」

「んじゃ、レッツらゴー！」

私達は集会所を後にした。

ミラはハ・ミルを経由して海停に行くと言った。ラ・シュガル軍の動きとかを探るみたい。

キジル海瀑側の入口に来たところで、何かの視線を感じて辺りを見回す。

「どうしたの、テスラ？」

「いや……何か誰かに見られてる気がして…」

「……気のせいではないか？」

ミラに言われて「んゝ、多分そうかも……」と私は呟き、再び歩きだした。

ミラ達が村から出る所を、四人の人間が遠くから見ていた。

「あの女がマクスウェルか。確かに力を失っていたのだな。」

赤い鎧を身に着けた男性が聞く。聞いた相手はキジル海瀑でミラ達を襲った青いスーツの女性だった。

「ええ、間違いありません。」

「“カギ”を別の場所に隠されたとなると厄介だな。」

赤い鎧の男性の隣にいた、黒装束の男が言った。

「あの娘がマクスウェルと知っとったら、ワシが“カギ”の場所を吐かせたんじゃがのう……」

そう言ったのは、ハ・ミルで見た巨漢。

「まあいい。今となっては泳がせた方が都合がいいからな。」

「ラ・シュガルの目が奴らに向けられている隙に、我等は静かに事を運ぶのが得策です。」

「アグリアからの連絡は？」

「新たな“カギ”を作成する動きがあると…」

「……捨て置けんな…」

話の後、黒装束の男性は、巨漢を見て指示をだす。

「ジャオ、例の娘の管理はもういい。お前は“カギ”の件を追え。」

「し、しかし…」

巨漢…ジャオは何か言いたげに口を開くが

「ラ・シュガル軍が去ったのだから、お前が直に行く必要もないだろう。」

「データが無事なんだから、優先事項が変わるのは当然ね。」

「う、むう…」

ジャオは黙り込んだ。

「プレザ、お前はアグリアと連携してイル・ファンに潜入するんだ。」
「

次は青いスーツの女性…プレザに指示をだす。

「あら、マクスウェルはいいの？」

「すでに“駒”を仕向けた。“カギ”の在りかも探らせる。」

話は終わり、三人はその場から居なくなる。

「……あの娘、我等の視線に気付いたとはな。……侮れん…」

赤い鎧の男性はそう呟いた後、その場を去っていった。

キジル海瀑に入った辺りで、突然ミラが立ち止まる。

「どうしたの、ミラ？」

「うむ、イル・ファンへ海からいけない場合どうするかを考えていなかったのな…」

「確かに……というか、海がダメなら陸路しかないよね…」

と私が言って、皆で考え始める。その時……

「なら、サマンガン海停でカラハ・シャル経由じゃないか？」

「「「アルヴィン(?)!!」」」

私達は驚いた声で同時に言う。私だけ疑問付きだ…

「どうしたの？先に村を出たんじゃ…」

私が聞くと、こう答えた。

「巫子殿に頼まれたんだよ。“お前達だけじゃ不安だ”とな。それに、依頼に見合った以上の報酬を貰うのは俺の矜持きやうじに反するからな。」

アルヴィンは報酬の袋を見せながら話す。

「アルヴィン、来てくれるんだね！嬉しいよ！」

「あれま、俺って随分信頼されてるな。」

「よろしく頼むぞ、アルヴィン。」

ジュードとミラはアルヴィンを信頼しきっているが、私は疑問が浮かぶ。

（何かふに落ちない……それにあのイバルが頼むかな？あいつはさつきまで“自分が行く”って言ってたのに……）

イバルの性格を考えると、何か不自然な気がする。

だが、考えていても疑問は解消されないし、ジュード達は一緒に行こうとしてるので、「まあいいか。」と思った。

（いざとなったら、私がアニキとミラを守る。）

そう心に誓い、皆と先へ進んでいった。

九話：新たな旅立ち、動き出す陰謀（後書き）

次はいよいよエリーゼが出ます！

十話：孤独な少女とぬいぐるみ（前書き）

エリーゼ登場です。

十話…孤独な少女とぬいぐるみ

一度通ったからか、すぐにハ・ミルへと着く。だが、何だか騒がしくてその場所へ急いで向かった。

すると、村人達が広場に集まっていた。よく見ると、村人の視線の先には、あの時のぬいぐるみを持った少女がいた。

「この疫病神！あんたがいるから…！」

突然一人の村人が叫び、近くの石を少女へと投げつける。他の村人も石を投げながら「出ていけ！」と叫ぶ。

「きゃ…！」

「ヤメテー！乱暴なことしないで〜！」

私とジュードは今にも石を投げつけようとした村人達の腕を掴み、やめさせる。

「お前は…！」

「何してるんですか?! こんな小さな子供に寄ってたかって…!!！」

「そうだよ! 何があったか知らないけど、大の大人がこんな事して恥ずかしくないの?!！」

私達は怒鳴った後、少女に近づき声をかける。

「大丈夫？」

「怪我とかない？」

だが少女はすぐにその場から走り去ってしまった。

「おぬしらのせいで村は目茶苦茶じゃ…！今すぐ出ていけ！！」

そう叫んだのは、あの優しくしてくれた村長さんだった。

周りを見ると、あちこちで怪我をしている人達がいる。おそらく、ラ・シュガル軍にやられたのだろう。

「随分酷くやられたんだな…：けど、あんな小さい子に八つ当たりするのはどうかと思うぞ。」

「元々ジャオ殿が連れて来た子じゃ、これだからよそ者と関わるとろくな事にならない！早く出ていっとくれ！！」

そう言って村長さんと村人達は帰っていった。

村人がいなくなった後、私はあの少女が気になった。ジュードも同じようで、少女が走っていった先をジッと見ている。

「ミラ…」

ジュードがミラに話し掛ける。ミラは話の内容を察したらしく、

「私達は村長にラ・シュガル軍について話を聞いてくる。あまり時

間はないからな。」

と言ってくれた。

「ありがとう、ミラ！」

「すぐに戻るから！」

私達は少女が走っていった先へと進んだ。

少女を探していると、一軒の家があった。

私達は家の中に入るが、誰もいない。

「あれ、ここじゃないのかな…？」

私が考えてると、ジュードが私を呼んだ。

「テスラ、こっち来て。」

「どうしたの、アニキ…って、地下室？」

来てみると、そこには地下へと続く階段と地下室の扉が見える。

「ひょっとしたらあの子は地下室の中かも…」

私達は地下室へと入った。

地下室の中は沢山の樽が保管されていて、酒の香りがする。おそらく酒蔵だろう。

地下室の奥へと行くと、あの少女がいたが、私達を見た途端、隅っこに縮こまってしまう。

「……少しお話しょっか。」

「大丈夫、私達はイジメたりしないよ。」

私達はそう言って少女に近づく。少女がこちらを向いてくれたので、私達は少し屈んで目線を合わせながら話しはじめる。

「こんにちは。前にも一度あったよね？」

「あの時はありがとうね。」

そう言って少女を見ると：

「こんにちは！！」

少女が持つ人形が返事をした。

私達はすごくビックリして後ろに倒れてしまう。

「あれ〜？おにーさん達、結構臆病なんだ〜」

「ティポ……名前、なの。」

少女は人形に視線をむけて紹介する。

「彼女は、エリーゼって言うんだ！僕はエリーって呼んでるけどね〜」

今度は人形…ティポが少女ことエリーゼを紹介し、「よろしくね!」
と言った。

「あははは……よろしく、二人とも…」

「よ、よろしく…」

私達はぎこちなく返す。

「……あの……大、丈夫……えと……ですか…」

エリーゼが私達に聞いてくる。

「うん、ちょっとビックリしたけど…」

「私も…」

立ち上がった後、再び視線を合わせるために屈む。

「自己紹介がまだだったね。僕は、ジュードって言うんだ。」

「私はテスラって名前だよ。」

「ジュード君、テスラ君! 助けてくれてありがとう!!」

「ありがとうございます…」

エリーゼとティポがお礼を言う。

「ところで、村に一体何があったか知りたいんだけど、聞かせてもらえないかな？」

エリーゼとティポは村に起こった事を話していく。

始め兵士が来た時はおっきなおじさんが倒してくれたらしい。

だがそのおじさんがいなくなった後、村人達は兵士に暴行を加えられたそうだ。

おっきなおじさんとは、大鎚を持つあのオッサンの事だろう。

保護者か知り合いかと思ったが、二人は“あのおじさんにここに閉じ込められた”との事。

「じゃあ、エリーゼは友達を待ってるの？」

ジュードが聞くとエリーゼは首を横にふる。

「……友達……いないから…」

「じゃあ、僕達がエリーゼの最初の友達だね。」

「お互い自己紹介とかしたしね。」

そう言うときエリーゼは照れながらもとても嬉しそうな顔をする。

「はい…！」

「うわーい！ジュード君とテスラ君はトモダチー！」

だが、私はエリーゼをどうするか迷っていた。村人からは迫害され、あのオッサンからは閉じ込められ、エリーゼにとって安らげる場所

ではない。

どうしようかと考えてると、ジュードがエリーゼに聞いてきた。

「エリーゼ、君の事を僕達の友達に話したいんだけど……いいかな？」

「どうして……ですか？」

「僕はエリーゼが村人にイジメられるのがイヤなんだ。だから、僕達の友達と何か方法がないか相談したいんだ。」

ジュードが答えた後に少し間があり、

「ジュード君はエリーの友達だから信じてあげる！ね、エリー！」

「はい……」

と承諾してくれた。

「じゃあアニキ、そろそろミラ達に合流しないと……」

「そうだね……エリーゼはここで待ってて。」

そう言って行こうとするが、ジュードはエリーゼに手を握られ、その場に止まる。

「……一緒に行こっか？」

ジュードに聞かれて頷くエリーゼ。

私達はエリーゼと共に、広場へと向かった。

広場につくと、ちょうどミラとアルヴィンが家から出てきた所だった。私達はエリーゼの事情を話した。

ミラ達はあまり収穫はないようだ。ただ、村長さんが言ってたジャオという人は、あのオッサンだと言う事がわかった。

「なるほど……ジャオには閉じ込められ、村人からは迫害される……救われないな……」

「ねえ、ミラ……エリーゼを連れていけないかな……」

ジュードはミラに聞く。

「連れ出してどうする？その先は考えているのか？私達の旅の目的もわかっているだろう。」

「うん……」

ジュードはミラから顔を背ける。

「ミラ、エリーゼは私達が何とかするし、守っていくからさ。それに、ミラ言ってたじゃん。

“自分の成すべき事をそのままの自分でやってみろ”って。」

私はジュードに助け舟を出す。

少し間を置いて、ミラが口を開く。

「……わかった、いいだろう。」

「ありがとう、ミラ！エリーゼに伝えてくるね。」

そう言ってジュードはエリーゼに駆け寄り、先程の話をしている。私は少し離れた所で二人を見ていた。

「何か以外だな。俺はてっきり“ダメ”って言うと思ってたぜ？」

「ジュード達が決めた事だ。そもそもこの旅は私一人で行くつもりだったしな、必要なら置いていく。」

（ミラ、生々しい事考えてんな…）

ミラ達の話聞いた私は、背筋がゾクツとした。

話が終わり、ハ・ミルから出るとき、エリーゼはふ、と止まり村人に手を振った。

村人の視線は冷ややかですぐにどこかに行ってしまったたり、目を逸らす人もいた。

ジュードが「行こう、エリーゼ…」と声をかけ、エリーゼと共に進んで行く。私も、二人の後ろについて歩いていった。

やはり一度通ったからか、早くイラート海停に着いた。しかし……

「申し訳ありません。現在、首都圏全域に封鎖令がだされて全便欠航なんです。」

「他の船は？」

私が聞くと、

「サマングン海停への船だけですが、今日は最終便が先程行ってしまったので明日になりますね。」

もう今日はこれ以上進めないみたいだ。

「そんなじゃ、宿に泊まって明日の朝一番の船に乗りますか。」

「うむ、仕方あるまい。今日はもう休むとしよう。」

グウウウウー！！

ミラが話し終わると同時にお腹がなった。さらに…

くうー！

音の出た方を見ると、エリーゼが顔を真っ赤にして下を向いている。ティポが「成長期だから大目に見てー！」と叫んだ。

「……確かにそろそろ夕食の時間だね。」

「んじゃ、急いで宿屋にレッツらゴー！」

私達は宿屋へと向かった。

十話：孤独な少女とぬいぐるみ（後書き）

相変わらず展開遅くてすみません…

十一話…不思議な夢、ジャオとの遭遇（前書き）

テスラは以下の技を覚えた！

鷹爪脚、礫岩迫落撃

十一話…不思議な夢、ジャオとの遭遇

気がつくと、見知らぬ場所だった。視界は霞んでいて良く見えない。

「……見えない…」

とりあえず先に進もうとした時、

ゴオオオオ!!!

突如聞こえた轟音が私を襲い、私の意識は遠退いた。

私は目を覚まし、辺りを見回す。ここは宿屋の一室で隣のベッド二つには、ミラとエリーゼがまだ眠っていた。時計を見ると、起きるには少し早い時間だ。

「……何だったんだ？あの夢…」

なぜあんな夢を見たのか考えるが…

「まあ、いいか。どうせ夢だし…」

私は深く考えずに、起きて着替えを始めた。

少しした後、全員起きてきた。私達はすぐに宿屋を出て、サマンガン海停行きの船に乗り出発した。

出発して少し経ち、周りには海が広がる。

「わぁ……！」

エリーゼが海を見てはしゃいでいる。だが、私達を見ると恥ずかしそうに「海……初めてなの…」と呟いた。

「うん。」

「私も初めて海見た時ははしゃいだから大丈夫。」

それを聞いたエリーゼは安心して、また海を眺め始める。私達はそっと離れてミラ達がいる場所に行く。

「にしてもあの子、村で何してたんだ？」

「監禁されていたのだろう？」

「逆かも。匿われてたって可能性もあるよ。」

（確かに監禁にしては部屋にカギとかついてないし…）

そう考えてると

「きゃー！ー！」

「「エリーゼ?!」」

私とジュードは慌てて振り向くが、そこにはティポと楽しそうにするエリーゼが。

「あはは。タイプ、見て！」

「海ってすごい！落ちたら死んじゃうところだった」

「悪い子じゃないよ。」

「だね。」

私達はエリーゼの笑顔を見て、少し安心した。

「エリーゼを引き取ってくれる人、見つかるかな…」

「それは自分自身で見つけるしかあるまい。君とテスラが決めたのだからな。」

「まあ、頑張るよ。……ところでアニキ。エリーゼに誰かに引き取ってもらおう事伝えた？」

「あ……」

私はハア、とため息をついて「私が話すよ。」とジュードに言い、エリーゼにこの事を話した。

始めはやはりビックリされたが、とりあえず理解してくれたようだ。

（でも、あの様子じゃあ私達と行きたい！って絶対言いそう…）

少し不安になるが、エリーゼのためにもいい人を見つけよう、と私は思った。

「そろそろサマングン海停に着くね。」

「うん…」

「さて、警備はどれほどかねえ。」

私達が気を引きしめた時、

「ミラ君は友達〜！ジュード君とテスラ君はもっと友達〜！！」

ガクッ！！

ティポの声に一気に緊張が緩んでしまった私達だった……

サマンガン海停に着いて辺りを見回す。

「警備兵はいるけど、なんか少ない？」

「確かに……一時期は外国に兵を出すほどだったのに……」

「お前さん達を追いかける以上に大事な事が出来たのかもな。」

「何にしても好都合だ。行くぞ。」

そうは言ったが、私達のあまりにも似てない手配書を見ついたり、おじいさんから魔装獣の話を聞いたりと少し寄り道をしてしまい、少し遅れて出発した。

街道を進むと、軍が検問を行っているのが見えた。

「あちや〜、道塞がれたね。」

「ま、そう簡単に物事は進まないさ。」

「ねえ、あっちには何があるの？」

ティポが聞いたのは検問が行われている道の反対側にある道だ。

「あっちにはサマングン樹海っていう大きな樹海がある。そこをうまく抜ければ検問を通らずにカラハ・シャルルに行けるが…」

アルヴィンが説明をした。

「迷う必要はないな。」

ミラは樹海へと向かおうとする。

「滅多に人が立ち入らないんだよ！ エリーゼには…」

「こうなる事は予測できただろう。」

「……………」

ミラに返され、黙り込むジュード。

「あの……私……大丈夫です……だから…」

「ケンカはやめてー！ 友達でしょー！」

エリーゼとティポはジュードとミラがケンカしてると思い、やめさせようとしている。

「エリーゼもこう言っている。問題なからう。」

ミラは先に行ってしまった。

私はジュードに近づき、言葉をかける。

「私達がエリーゼを守れば大丈夫だよ、アニキ。エリーゼも、もし歩き疲れたら無理しないで言ってね？」

「あ……ハイ、です。」

「テスラ君優しい」

「それじゃ、樹海へレッツらゴー！」

私達もミラを追って樹海へと向かった。

――

樹海に入ると、木々の葉が太陽を遮るせいで結構暗い。

「ここがサマングン樹海……」

「さすが樹海というだけあってたくさん木が生えてるね。」

私達は周りを見渡すと、木の上に魔物がいた。だが、魔物は私達を見た後にどこかに行ってしまう。

「何だ、ありゃ……」

「今のはシルヴァウルフだね。」

「警告かも…これ以上入るな、って。」

「いや、仲間に知らせにいったって感じだけど…」

私達が話していると、ティポに呼ばれる。ミラとエリーゼが木の根が重なって通れる場所を見つけたらしい。

「ここから通れるみたい！三人とも早く！」

「やれやれ、女性陣は勇敢なこと…」

私達は先へと進む。少し先へ進むと、背後から木の様な魔物が襲ってきた。

「シルヴァトレントだ！普段は他の木に擬態して獲物を捕まえる魔物だよ。動きは遅いけど力は結構あるから気をつけて！」

私達はエリーゼを隅へと避難させて戦闘に入る。だが……

ブン！

「くっ…！」

「こいつの攻撃範囲……広いな。」

「でかいからリーチが長いんだ。」

「気をつけないければ全員やられしまうな…」

するとエリーゼが私達に近づいてくる。

「ダメだよエリーゼ！」

「危ないから下がって！」

「お前を守りながらでは戦えない、邪魔だ！」

私達がよそ見してるうちに、シルヴァトレントは腕を使い、私とジュードを吹き飛ばす。

「っあ?!」

「がっ?!」

全体に痛みが走る。するとエリーゼが泣きながら近づく。

「う……うつ……」

すると私達を中心に魔法陣が展開され、先程の痛みが引いていった。

「これは……」

「全員回復させた……すごい……」

「大丈夫！僕たちがついてるよ！」

再び戦闘に入る。今度はエリーゼも加えてだ。

「シルヴァトレントは火属性が弱点だよ！アニキ、お願い！」

「うん、行くよ!」

私とジュードはリンクして、シルヴァトレントに素早く近づき、ジュードは巻空旋、私はジャンプしてファイアボールを放つ。

「「エアリアルファイア!!」」

シルヴァトレントは力尽き、その場に倒れた。

「ふう、何とか倒したね。」

「しかし、その歳でこれほどの精霊術を使えるとはな…。」

「大したものだ。」

「今回はエリーゼに助けしてもらったね。」

だが、エリーゼはまだ泣いていた。

「どうしたの? もう大丈夫だから…」

「違うの…」

エリーゼが小さく呟く。

「仲良くしてよ! 友達は仲良くがいいんだよ!」

ティポはミラとジュードを見てそう言った。

「わたし……邪魔にならないから…」

エリーゼとティポは自分達のせいでジュードとミラがケンカしていると思っていたらしい。

「エリーゼに免じて仲直りしたら？ミラ。」

「免じて何も、私達はケンカなどしてないが…」

「ウソ〜ん。ジュード君とミラ君、もっと仲良しだよ。」

「私…頑張るから…」

全員がミラを見る。

「クククッ、様完全に悪者だぜ？ミラ様。」

「うむ…いつの間にか私が悪者か……わかったよ。」

ミラが言い終わると、アルヴィンがジュードとミラに腕を回して、
「何か言う事あるだろ？エリーゼ姫にさ。」と言う。
うんうん、と私も頷く。

「心配かけちゃったね。ありがとう、エリーゼ。」

「すまなかった。これからはお前の力、当てにするぞ、エリーゼ。」

エリーゼは少し照れながらも嬉しそうな顔をした。

「それじゃ改めて、カラハ・シャル目指してレッツらゴー！」

私達は先へと進んだ。

魔物を退けながら、私達は樹海をどんどん進んでいく。途中ケムリダケを踏んでヒドイ目にあっただけだね…。

出口近くに差し掛かった時、私達はシルヴァウルフの群れに囲まれる。

「こいつら…」

「やる気になったか…」

私達が武器を構えると、奥から誰かが歩いてきた。

「おうおう、よう知らせてくれたわ。」

それはハ・ミルで見たあのオッサン…。

「「ジャオ（さん）?!」」

「おっきなおじさん…?!」

エリーゼは緊張した声で呟く。

「む？お前達に名乗った覚えはないが…」

「ハ・ミルの人達にな。…で、何のご用で？」

アルヴィンがジャオに聞く。

「知れた事……さあ娘っ子、村へ戻ろう。わしが目を離してる間に村から出たと聞いた時は心配したぞ。」

ジャオは優しい口調でエリーゼに語りかけるが、

「イヤ〜！ジュード君、テスラ君助けて〜！」

エリーゼとティポは私達の後ろに隠れる。

「……むう……」

ジャオは困った様々に後頭部を掻いた。

「ジャオ、あんたはエリーゼとどういう関係なの？」

「彼女が以前いた場所を知っておる。彼女の育った場所だ。」

「じゃあ、エリーゼをそこに帰すんですか？」

ジュードがそう聞くとジャオは目を逸らして黙り込む。

「……また、ハ・ミルに閉じ込めるつもり？」

「お前達には関係ないわい！娘っ子を渡してもらおうぞ！！」

ジャオは大鎚を取り出して構える。

「閉じ込める、ってわかってて渡すもんか！」

「エリーゼは渡さない！」

私とジュードはジャオに言い放つ。

「……仕方あるまい……！」

私達とジャオとの戦いが始まった……

十一話…不思議な夢、ジャオとの遭遇（後書き）

次回、ジャオとの戦闘です！

十二話：VSジャオ（前書き）

今回はいつもよりも結構短めです。

十二話：VSジャオ

「エリーゼ、わしと一緒に来い！」

「「イヤです（だー）！」」

エリーゼとティポは同時に言葉を返す。

ミラとアルヴィンは周りのシルヴァウルフ達を相手に、私とジュードはジャオに向かって走り出し、殴り掛かる。

「連牙弾！」

「幻竜拳！」

ジャオの腹に攻撃が当たるが、ピクリとも動かず、ダメージを受けてないように見える。

「そりややややー！」

ジャオは大鎚を私達に向けて振り下ろす。

私達は横へと急いで回避する。

私達がいた地面は鎚によって大きくえぐられた。

「普通の攻撃でこの威力……強い……」

「けど、エリーゼを渡すわけにはいかないよ！」

私はスピードを生かしてジャオの背後に回ろうとした。その時

ピイイイー！

ジャオが指笛を吹く。すると、どこからともなく魔物が現れ、私達を襲う。

キイイイー！

「くそっ…！」

大きな鷲の様な魔物…ホークに邪魔されて上手くジャオの背後に回れない。

私がホークの攻撃を避けた瞬間、ジャオの声が響く。

「スキだらけだぞ！戦迅狼破！！」

ジャオは私に向かって狼の闘気を放ち、攻撃する。闘気をまともに受けた私は後ろへ吹っ飛ばされた。

「ぐあっ！…っ…」

「テスラ…！」

「回復するよー！」

エリーゼとティポがそう言って詠唱を始める。

「彼の者に癒しを……ピクシーサークル！」

エリーゼの回復術が私の傷やダメージを回復してくれる。

「ありがとう、エリーゼ！」

私はエリーゼにお礼を言って立ち上がる。

「テスラ！」

「大丈夫、行くよ！」

私はホークを倒し終えたたジュードとリンクしてジャオに向かって走り出す。

「魔物は倒した、アルヴィン！」

「ああ、行くぜ！」

ミラやアルヴィンも魔物達を倒してジャオに向かっている。

「お前達は甘いのか……」

そう呟いた途端に、ジャオの纏うマナの鋭さが増すのを感じた。

「っ?! アニキ、ガードだ!!」

「テスラ?!」

私がジュードに言った瞬間、ジャオが地面に向かってマナを纏った鎚を振り下ろす。

「おおおお！魔王地顎陣！！」

ジャオを中心に広い範囲の地面から石柱が飛び出して私達を襲う。

「わあああ？！」

「ぐあっ？！」

「がはっ？！」

「ぐっ…つう…？！」

「ジュード、テスラ…？！」

「みんな…？！」

エリーゼは技の範囲外にいて無事だ。

私はガードをして何とかダメージを減らしたが、ジュード達はずぐには立てない状態だった。

「どうする、まだやるか？」

ジャオは全然息を乱しておらず、対して私達はボロボロ…勝てる可能性は無しに等しい。

だが、負ける訳にはいかない。このままではエリーゼは再びハ・ミルに閉じ込められ、また一人になってしまう。

私は皆の前に立ち、武器を構える。

「エリーゼ、皆の傷を癒してあげて……その間、私がジャオを止めるから。」

「で、でも……テスラ、怪我が…」

「テスラ君もボロボロだよ！」

私を心配してくれるエリーゼとティポ。私は二人を見て「大丈夫。」と笑顔で言っただけジャオを見る。

「もう止めた方がいい。今のお前は娘っ子の言う通りボロボロだ。これ以上戦っても意味はない。」

ジャオはそう言って戦いを終わらせようとする。それはどこか“お前達をこれ以上傷付けたくない”と言ってるようだった。

「……それでも、私は戦うよ……エリーゼを連れてはいかせない……それに……私はアニキやミラを……仲間を守るって、決めたんだ……！」

私は力一杯叫び、ジャオに向かって走り出す。

「……ならば仕方ない……！」

ジャオも大鎚を構えて走り出す。

「おおお！牙狼撃！」

ジャオが私目掛けて鎚を振るう。

私はジャンプして鎚を回避し、ジャオの頭上へ一撃を加える。

「鷹爪脚！」

私は再びジャンプして地面に着地する。ジャオは少しよろめくが、すぐに私を捕まえようと腕をの伸ばしてくる。

私は素早く避けてジャオの背後に回る。だが…

「甘いと言うておろう！ 烈震天衝！！」

ジャオも素早く私に向き直りながら、鎚と拳で連続攻撃した後、地属性の一撃を叩き込んだ。

「がっ?! ……まだまだあ!!」

ダメージはかなりのものだった。それでも私は激痛に耐えながら、真っすぐジャオに向かって突進する。

「なっ?!」

ジャオは意表をつかれたらしく、僅かに反応が遅れた。

「迫撃掌!!」

ジャオの僅かな隙について、技を繰り出してダウンさせる。そしてジャオの足を掴み、遠心力を利用しながら横にブン回して投げつけた。

「うおおお！ 礫岩迫落撃!!」

ジャオは思っきり投げられ、木々が集まった場所へと叩きつけられた。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

私は息を切らしながらジャオが投げつけられ、土煙が舞う場所を見つめる。

「……今のは、ちいと効いたぞ……」

ジャオが少し息を切らしながらも堂々と土煙から出てきた。

「テスラ！」

「どんだけタフなんだよ……」

エリーゼに回復してもらったジュード達が私に近づいてきた。

「……何故だ、娘っ子。……その者達と居ても、安息はないぞ？」

ジャオはエリーゼを見ながら聞いた。

エリーゼはジュードと私に近づきながら叫ぶ。

「友達って……言ってくれたもん……！」

「もう寂しいのはイヤだよ……！」

ジャオはその叫びを聞いて、辛そうな顔をした。だが、それでもエリーゼを連れて行こうとする。

「わしも、本意ではないのだ……許してくれ……」

するとジュードは何かを見つけたらしく、アルヴィンに小声で話す。その後、アルヴィンはジャオに銃口を向ける。

「止めておけ。もう、お前達に勝ち目はないぞ。」

だが、アルヴィンはジャオではなく、ジャオの隣にある枯木に銃を連射した。

枯木は銃の攻撃に耐え切れず、倒れていく。そして、倒れる木の下には沢山のケムリダケが……。

「口を押さえて!!」

ジュードが叫び、私達は口を押さえた。瞬間、倒れた木がケムリダケに当たり、胞子が勢いよくばらまかれる。

私達はすぐさま出口へと走り出し、その場から去って行った。

ケムリダケの胞子が辺りを漂っている中、ジャオはジュード達が走って行った方向を見つめていた。

「寂しいのは嫌……か……」

ジャオは呟く。

「お前は、あの者達と共にいた方が幸せなのかもしれぬな……どう

か、生きておくれ……エリーゼ……」

ジャオはその場からゆっくりと去っていった……

十二話…VSジャオ（後書き）

戦闘がいつもテスラばかり最肩してしまう……

十三話…出会いと別れの町（前書き）

やっとかラハ・シャルです。おじいちゃん出てきます。

十三話…出会いと別れの町

樹海を抜けて、そのまま街道を進んでいき、私達はようやくカラハ・シャルルへと着いた。

「やっとカラハ・シャルルに着いたね。」

「えらく遠回りしちゃったな。」

「もう、おっきなおじさん追って来ないかな？」

とティポは後ろを向いて心配そうに言う。

「さすがにここじゃあ目立ち過ぎるから入れないと思うよ。」

私はティポにそう言って安心させた。

「テスラ、大丈夫？どこか休める場所が見つかればいいけど…」

「確かにまだ疲れはあるけど大丈夫だよ。アニキとエリーゼに回復術かけてもらったしさ。」

樹海から出た時、私は疲労と怪我で立つのも辛い状態だった。なのでジュードとエリーゼに怪我の治療をしてもらっていたのだ。

「それより、みんな行っちゃうよ？私達も行こう。」

私とジュードはミラ達が向かう骨董屋の前へと行く。

「いらっしゃい。どれも一級品ばかりですよ！」

「骨董か、ふむ……」

ミラは興味津々で商品を見つめている。

「なんだか、町のあちこちが物騒だな？」

アルヴィンは骨董屋の店主にさりげなく、軍の動きを聞いた。周りを見ると、あちこちで武装した兵士がいる。

「ええ、何でも首都の軍研究所にスパイが侵入したらしくてね。王の親衛隊が直々に出張って来て、怪しい奴らを片っ端から検問させてるみたいなんですよ。全く困ったもんで……」

そう言って店主は私達を見ると、一瞬驚いた顔になる。

「あの……その、えっと……」

ジュードはバレたと思ってか何か言おうとしている。

（大丈夫だよ、あんな手配書でバレないって。自然に自然に。）

私はジュードだけに聞こえるくらいの小さい声で言う。

ふとエリーゼを見ると、先にいた女性が手にしているカップを見ていた。

「キレイなカップ…」

「でも、こーゆーの高いんだよねー？」

ティポがそう言うのと、店主は自慢げに話し出す。

「そりゃそうですよ。なんせそれはイフリート紋が浮かぶ一品ですからね。」

「イフリート紋！これはイフリートさんが焼いた品なのね！」

女性が感動したように言う。するとミラが女性からカップを取り、器用に回し始める。

「ふむ、それはなかりう。彼は秩序を重んじる生真面目なやつだ。こんな奔放な紋様は好まない。」

そっか、ミラはマクスウェルだからイフリートの事をよく知ってるもんね。

「ほっほっほっ……面白いですね。四大精霊をまるで知人の様に…」

ミラの話聞いて、女性の傍にいた老人が話し掛けてきた。

「確かに、本物のイフリート紋はもっと幾何学的な法則性を持つものです。」

そう言うのと、セットの皿を手に取り、裏側を見る。

「おや、この皿は18年前に作られた物ですね…」

「それが……何か？」

店主はなんか焦った感じで聞いてくる。

……あれ？18年前って事は…

「おかしいですね？20年から四大精霊の召喚は不可能なはずですが？」

店主は「うつ…」と言葉を詰まらせた。偽物だったか……まあ、イフリート紋の偽物って結構あるみたいなんだよね。

「残念……イフリートさんの焼いたカップじゃ、なかったのね…」

女性は残念そうに言う。

「でも頂くわ！このカップが素敵なのは本当だもの。」

女性はすぐに笑顔になりカップをお買い上げ。

……偽物ってわかったらフツー買わないよ……？ほんと人それぞれの考え方がるなー、と私は思った。

「ハ、ハイ！お値段の方は、勉強させていただきます。」

私達は女性達と一緒に骨董屋を後にする。

「貴方達のおかげでいいお買い物が出来たわ。本当にありがとう。私はドロツセル・K・シャルよ、よろしくね。」

「私は執事のローエンと申します。どうぞお見知りおきを。」

二人は私達に自己紹介をする。

「そうだわ！お礼に皆さんをお茶会にご招待したいのだけど…」

「お！じゃあお言葉に甘えて、後でお邪魔しますか。」

「私の家は町の南西地区にある大きな家です。お待ちしてますね。」

そう言ってドロツセルとローエンは先に帰っていった。

「そんな事をしている暇はないハズだが？」

「まあまあ、ここに居る間は利用させてもらおうぜ？」

「それにこの警備じゃ、宿屋も使えないだろうし…」

アルヴィンとジュードがそう言うのと、

「ふむ……では情報を集めた後、お茶会に行くでしょう。」

そう言ってるミラの顔はとてもキラキラしていた。

……何だかんだ言って行きたかったんだね、お茶会…。
ジュードとアルヴィンなんか思わず吹き出してるよ…。

私達はある程度情報を聞いた後、ドロツセルの言っていた家へと向かう。すると、ドロツセルとローエンが出迎えてくれた。

「お待ちしてました。こっちよ。」

そう言われて先を見ると、とんでもなくデカイ豪邸が建っていた。

お嬢様とは思ったけど、まさかこれほどとは……

そう思っていると、家の入口から厳つい感じで額に傷をつけた中年の男性と、グレーの髪をした男性が出てきた。そしてその周りには……

「…ッ?! ラ・シュガル兵!」

ミラは兵士に向かって剣を抜こうとするが、アルヴィンに制止される。

相手はこちらに気づく事なく、男性二人は馬車に乗り込み去っていった。

「お客様はお帰りのようですね…」

ローエンが呟く。一瞬、暗い表情をした様に見えたが、すぐにいつもの顔に戻る。

私達はそのまま豪邸の入口までくると、一人の青年が私達に近づいてきた。

「お帰り、ドロツセル。お友達かい?」

「お兄様!」

ドロツセルは青年に近づいた。

この人、ドロツセルのお兄さんか……確かになんか雰囲気似てるな。

「お兄様、紹介します……あ、まだ皆さんの名前を聞いてなかったわ」

そう言えば……と私は思い出す。

「フフフツ、妹がお世話になったそうですね。ドロツセルの兄、クレイン・K・シャルと言います。」

「クレイン様はこの町、カラハ・シャルを治める領主様です。」

「領主?!」

ジュードが驚いて声を上げた。いや、私達もかなり驚いたけどさ……まさか領主だったとは…。

その後、私達は家の中に通されてお茶会が始まる。

家が大きいだけに中もとても広い。周りにはとても高そうな品がズラリとあった。

「成る程、またドロツセルが無駄遣いするところを皆さんが助けてくれたんですね。」

「ひどいわお兄様。協力してお買い物したのよねー。」

「ねー。」

ドロツセルに合わせてティポが返事をする。

するとローエンがクレインに何かを話し、「急用が出来たので席を外す」と言ってその場を離れていった。

アルヴィンも席を外してしまう。本人曰く、「整理現象」だそうだ。

「ねえねえ、皆はいろんな場所を旅して来たんでしょ？よかったら話を聞かせてくれないかしら？」

そう言っ、私達は旅の話をして盛り上がった。主にエリーゼとティポがね。

私はお茶やお菓子を少し食べながら休んでいた。おかげで疲れもかなり回復する。

「アニキ、そろそろ町から出た方がいいんじゃない？私も休めたし……」

「そっか、それじゃあそろそろ……」

「申し訳ありませんが、貴方達が王都の研究所に侵入したとわかった以上、まだお帰りいただくわけにはいきません。」

突然後ろからクレインの声が聞こえて振り向くと、そこにはクレインと兵士がいた。

「い、一体なんのこと……」

「とぼけても無駄です。アルヴィンさんが全て話してくれました。」

「なっ?!」

（アルヴィン……後でとっちめてやる!!）

「私達を軍に差し出すつもりか？」

ミラがそう聞くとクレインは首を横にふる。

「いえ、研究所で何をしているのかを教えてください。……ラ・シュガルはナハティガルが王に就いてから変わってしまった……何をしているのか、六家の人間ですら知らされていない……」

少しの沈黙の後、ミラが話し始める。

「研究所では、人間から強制的にマナを吸い出し、新兵器の開発をしている。」

「人体実験を?! まさかそこまで……しかし、そうすると辻褄が合う……」

クレインは沈黙した。

「実験の首謀者はラ・シュガル王、ナハティガルなのか?」

「……おそらく、そうなります。」

自分達の国の王様がこんな事を……私は怒りから歯を食いしぼる。

「……ドロツセルの友達を捕まえるつもりはありません。しかし、即刻町から出てもらいたい。」

「……ありがとうございます。」

私達はクレインに感謝して屋敷から出ていった。

屋敷を出て真っ直ぐ、宿屋の近くにアルヴィンがいた。

「よ、お前ら。」

「アルヴィン君のバカー！アホー！略してバホー！！」

「そうだ！アルヴィンのバホー！投げ飛ばすぞこのヤロー！！」

私はティポと共にアルヴィンを攻める。

「何だよそれ……と言うかテスラに投げられたくねえな……」

「何故私達をクレインに売った？」

ミラはアルヴィンに聞くと

「売ったなんて人聞きの悪い……クレインが今の王に反抗的なのは有名だからな。情報を得るにはうってつけた。だからこっちの情報を交換したワケ。……いい情報聞けたろ？」

「……ラ・シュガル王、ナハティガル……彼が元凶のようだ。彼を討たねば第二、第三のクルスニクの槍が造られるだろう。」

「王様を討つの？」

ジュードは驚きながら聞く。

「ああ。君達国民は混乱するだろうが、見過ごすわけにはいかない。」

「ま、そんな酷い事する王様はぶっ飛ばさないとね。」

「ぶっ飛ばすのはどうかと思うけど……でも、王様がしてる事は止めないといけない。」

そうして話をしていると、ラ・シュガル軍の兵士に気づかれた。

「貴様ら、手配書の！」

「町で堂々としすぎたか……」

私達は兵士を倒そうと構えるが、誰かが話しながら近づいてきた。

「南西の風2……いい風ですね。」

「執事さん？」

そこにはクレインとドロツセルの執事であるローエンがいた。

「この場は私が……」

そう言ってローエンは兵士に背中を向ける。よく見ると、手にはナイフが三本ある。

「おい、じいさん！こつちを向け！何してる？！」

兵士が怒鳴り声で聞いてくると、素早い動作でナイフを空高く投げながら「おお、怖い怖い……」と兵士に向き直る。

「おや？後ろのお二方、陣形が開きすぎではありませんか？それでは一呼吸で味方をカバーできる距離ではありませんよ？」

そう言われて後ろの兵士はお互いの距離を詰める。

「じいさん！指図するな！！」

前にいた兵士が怒っていると、

「貴方も、もっと前ではありませんか？私はともかく、このままでは後ろの方を捕まえる事はできませんよ？」

「ふん！」

前にいた兵士はローエンに言われた事とは逆に後ろにさがった。

「いい子ですね。」

すると、

カッ、カッ、カッ、キーン！

兵士達を囲む様にナイフが刺さり、魔法陣を形成して兵士の動きを封じた。

「それでは、失礼します。さあ、今の内に……」

私達はローエンについていき、兵士達から逃げる事ができた。

「ローエン君すごい！怖いおじさん達もイチコロだねー！」

「そんなイチコロなど……私など、相手を足止めするのが精一杯ですよ。」

タイプに褒められ、謙遜するローエン。

（でも、相手を誘導する話術といい、ナイフが正確に刺さる様に風の動きを予測してたりといい、一体何者？このおじいさん…）

「ところで、皆さんにお願いがあります。」

「お尋ね者連れた一行に頼むなんて、いい頼み事じゃないみたいだな。」

「はい。実は少し前にラ・シュガル王が屋敷に来られ、王命により街の民を強制徴用されたのです。」

「ナハティガルが来ていたのか?!」

「ひょっとして、あの馬車に乗った…」

私は馬車に乗った二人を思い出す。

「まさか、人体実験をするために…?」

「わかりません。民の危険を感じたクレイン様は、徴用された者達を連れ戻しに向かわれました。しかし、ナハティガルは反抗する者を許すような男ではありません…」

つまり、このままではクレインさんは殺されてしまう。助けるために力を貸して欲しい、という事か…。

「ドロツセルのお兄さん……危ないの…?」

エリーゼは不安そうに呟く。

「……行こう、クレインさんを助けに！」

「うん！連れていかれた街の人達も心配だしね。」

私とジュードはすぐに承諾した。

「あーあ、二人のお節介に火が着いちまったか。」

アルヴィンは呆れたように呟くが、イヤなわけではないみたいだ。

「わかった。ナハティガルの野望は阻止せねばならないからな。」

「皆さん、ありがとうございます。」

ローエンは深々と頭を下げた。

「民が連れていかれたのはバーミア峡谷です。急いで向かいましょう！」

「そんなじゃ、バーミア峡谷へクレインさん達を助けにレッツらゴー！」

私達はバーミア峡谷へ向かって進み始めた……。

十二話…出会いと別れの町（後書き）

さあ、次はバーミア峡谷へいきます！

十四話…峡谷の救出劇（前書き）

どなたかリンクアーツのネタを下さい……（涙）

十四話…峡谷の救出劇

クラマ街道を通り抜け、私達はバーミア峡谷へと入る。

「すごい地層だね。」

ジュードの言う通り、峡谷全体が巨大な地層になっている。しかもかなりの高さだ。

「はい、ここはラ・シュガルでも有数の境界帯ですからね。登るのも大変かと思えます。」

ローエンが説明してくれたところで、ふと上を見ると誰かがこちらに何かを向けている。あれは……ボウガン?!

「危ない！」

私は近くにいたエリーゼを庇いながら岩陰に飛び込む。瞬間、矢が地面に突き刺さる。

それを見て、全員が岩陰に隠れた。

「アルヴィン！」

アルヴィンは銃を兵に向ける。だが、場所が悪くて相手を狙えない。

「くそっ、どうする?」

「……僕が囨になるよ。その隙にお願い。」

ジュードが自分から囚役を買って出た。

「危険過ぎだよ、アニキ！私が…」

「僕がやるよ。テスラはまだ疲労が完全にとれた訳じゃないし、何より僕が言い出したんだから。」

ジュードは真っすぐ私に見てそう言った。

（アニキがハッキリと自分からやるって言うの、初めてかも……）
「わかった。気をつけてね。」

ジュードはコクリと頷く。準備が整い、ミラがサインを出してジュードは岩陰から出てきた。

相手はジュードに狙いを定め、ボウガンを発射する。ジュードは飛んできたボウガンの矢を顔を少しずらし、紙一重で回避した。

相手は避けられた事に動揺しているようだ。その隙に近くに隠れていたミラが飛び出し、相手に向かっていく。相手はミラに気づいて慌ててボウガンを向けるが、アルヴィンが銃で打ち落とす神業を見せ、ミラは相手を切り捨てた。

「助かったぞ、アルヴィン。」

「そう言われる所で活躍するのがデキる傭兵ってもんだ。」

「それを言わなかったら二枚目で決まったのに…」

兵士がいた場所を見ると、その下に紫色に光を発している洞窟が…。

「この気配……イル・ファンで感じた気配と同じ…」

「なにに、オバケー？」

「ここにもあの装置が…?!」

私達は洞窟の奥へと進んでいくと、紫の魔法陣越しに、巨大な装置が稼動していてマナを上のコアへと注いでいるのが見える。そして、牢と思われし部屋にはクレインさんと街の人達がいた。

「クレイン様!……やはり人体実験を…」

「これ……研究所にあった、ハウス教授を殺した装置に似てる!」

「ここでも黒匣の兵器を造ろうとしているのか?! 簡単に造れるものではないハズだが…」

ミラは魔法陣に触れようとするアルヴィンに止められた。

「やめときな、腕が吹っ飛ぶぜ?」

「どれ…」

私は近くにあった石ころを投げてみると……

バチバチバチバチ!!!

石ころは粉々に砕けてしまった。

マジで危ねえな、これ…

「けど、他に入れる場所なんて…」

「……見た所、この魔法陣は封鎖型ではありません。おそらく、余剰の精霊力をドレインしているものと思われます。頂上から侵入して、術を発動しているコアを破壊できれば…」

つまり、頂上まで登る必要があるのか……かなり高い場所にあったな…。

「とにかく急ごう！このままじゃ、クレインさん達の命が危ない！」

私達は洞窟を抜けて急いで頂上へと登り始めた。

197

魔物を倒し、険しい場所を登りながらようやく頂上に着く。だが…

「コアが作動してる?!けど、この高さ…」

「どうする？」

「時間がありません。噴き出す精霊力に対して魔法陣を展開させます。それに乗ってバランスを取れば無事に降下できるかも知れませんが…」

つまりは穴にダイブするという事だ。そして、コアを破壊するチャンスは一回だけ……かなり危険だが、やらなければクレインさん達が死んでしまう。

「よし、行こう！」

「他に方法はないしな。」

「うん、僕も大丈夫！」

「中々度胸がお有りのようですね。」

「ああ、見掛けによらずな…」

そう言うアルヴィンも、準備はいいようだ。

「エリーゼさんはここで待ってますか？」

ローエンが聞くと、エリーゼは首を横に振る。

「わたくしから離れないで下さいね……では、いきます。」

ローエンはナイフを上空に投げ、紙飛行機型の魔法陣を形成する。
私達は魔法陣に乗り込み、降下した。

バランスを何とか取りながら、私達は降下する。

……降下と言うより落下だけど。

すると、術を発動させているコアが見えてきた。

「アルヴィン！」

アルヴィンはコアを破壊するために銃を構えるが、揺れのせいで上

手く狙いが定まらない。

「くそっ、こうも揺れると…」

「これならどう?!」

するとジュードが自分の肩にアルヴィンの腕を載せた。

「……気が利くな…」

アルヴィンは狙いを定め、銃を撃つ。放たれた弾丸はぶれる事なく、コアに命中して砕けた。

コアが破壊された事により、稼動していた装置が停止し、閉じ込められていた人達も解放された。

「くっ……っ…」

「旦那様?!」

クレインさんが倒れてローエンが急いで駆け寄る。

私達も駆け寄り、私はクレインさんの脈等をチェックして異常がない事を確認する。

街の人達がなくなった頃、クレインさんが目を覚ます。

「旦那様!」

「ローエン……街の皆は…?」

「街の者全員、命に別状はございません。」

「そうか……よかった。」

クレインさんは安心した様に呟く。

「ナハティガルはここに居ないのか？」

「僕もそのつもりでここに来たのですが、逆に捕まってしまっ……」

ミラは「そうか……」と呟いた。

「もうこんなところ早く出ようよ……!!」

「そうだね。早く街に戻ろう。」

そう言って皆で戻ろうとした時……

キーン、キーン、ズブズブ……

コアがあつた場所が光だし、蝶の様な、蛾の様な魔物が現れる。

「なにあれ?!」

「あんな魔物、見た事ないよ?!」

「とにかくやるぞ! 構えろ!!」

クレインさんを安全な場所に避難させ、私達は謎の魔物と戦い始める。

「この魔物……どうやら特殊な精霊術を纏っているようです。」

「こいつを生み出す事が、奴らの狙いなのか?!」

ローエンとミラがそう話す。

「何だろう……この感じ、どこかで…」

「詮索は後にしてくれ!いくぞ!」

ジュードはこの生物に何かを感じたようだが、アルヴィンに止められ二人はリンクして謎の魔物へと向かっていく。

(アニキの言う通り、あいつからは何か身近に感じる気配が…)

「テスラ、避ける!」

「へ?…って、うわ?!」

ミラに叫ばれ顔を上げると、魔物が私にタックルを仕掛けてきた。

「よっ……と!」

私はギリギリで横に回避して難を逃れる。

「ぼーっとするな!やられるぞ!!」

「ゴメン!」

ミラに怒られ、私は素直に謝り、魔物へと攻撃を開始する。

だが、魔物は空を飛んでいるために中々攻撃が当たらない。

「くそっ、厄介だな……弱点がわかれば……」

私は術を使い、魔物の弱点を調べる。

「炎よ弾けろ……ファイアーボール！」

火の玉は魔物に当たるが、全く効いてないようだ。

他の皆も、攻撃が当たらず苦戦しているのが見える。

「次は……天杯溢れろ……スプラッシュ！」

水瓶が現れ、上から水が勢いよく魔物に当たるが、これも効かない。

「三度目の正直……大地よ貫け……ロックトライ！」

地面から勢いよく岩が槍の様に突き出す。魔物に当たると、魔物は悲鳴をあげて怯んだ。

「あの魔物の弱点は地属性だ！みんな、地属性の攻撃で攻めて！」

みんなが「わかった（了解）！」と返して、再び戦闘に集中する。

だがその時、魔物はいつの間にか遠くへ行き、詠唱して術を発動した。

「のあ?!」

術はアルヴィンに向けられ、私を巻き込み巨大な鐘がけたたましい音を奏でて私とアルヴィンを襲った。

「っくく…アルヴィン、無事?!」

私はアルヴィンの無事を確認する。しかし……

ブン!!

「うわっと?!…アルヴィン、何して…?!」

突然アルヴィンが私に攻撃してきた。私は避けてアルヴィンを見てみると、目が虚ろで表情もない。

「アルヴィン、何している?!」

ミラが怒鳴り込む。

「ミラ、アルヴィンはチャームにかかったんだ!!」

「チャーム?」

「敵味方の区別がつかなくなる状態変化だよ!光属性の術を受けるとなる事があるんだ!!」

「テスラさん、後ろです!」

ローエンに言われて後ろからの攻撃を回避すると、ジュードがいた。

ジュードもアルヴィンと同じ様に目が虚ろで表情がない。

「ジュードもか?! だが、ジュードは術を喰らってないハズだが…」
ミラが不思議がっている。

「そっか、アニキはアルヴィンとリンクしてたから…!」

「どう言う事だ?」

「リンクの副作用です。リンクしたどちらかが状態異常、変化になるともう一方にも移ってしまうのです。」

ローエンがミラに説明する。

私は今、ジュードとアルヴィンの二人から攻撃を受けている。

「テスラ、今助ける!」

ミラはローエンと共に私を助けようとするが、

「二人は魔物に専念して! またあの術を使われたらマズイ!」

「しかし…!」

「私は大丈夫! 避けるのは得意なんだ。だから…!」

「……わかった、頼むぞ!」

「お氣をつけて…」

ミラとローエンは魔物の方へと向かっていく。

「エリーゼ！ ジュードから先にリカバーをかけて！」

「わかりました！」

「任せろ〜！」

エリーゼは術の詠唱に入る。

その間、私はひたすら二人の攻撃を回避する。アルヴィンは大剣のパワーと銃を駆使してくるが、動きはそんなに早くないのでそんなに苦労はしない。

問題はジュードの方で、素早い動きで翻弄して攻めてくる。そして私がジュードに翻弄されてるスキについてアルヴィンが攻撃を仕掛けてくる。……正直肝を冷やす。

「……アニキを敵に回すとかかなり大変だな……」

その時、エリーゼの声が響く。

「いきます！……リカバー！」

ジュードにリカバーがかけられ、虚ろだった目が正気を取り戻していく。

「……あれ？ 僕、一体……って、アルヴィン?!」

ジュードは私に攻撃しているアルヴィンを見て驚いている。

「アニキ！アルヴィンに快気功を、早く！」

「わ、わかった！」

ジュードはアルヴィンに少し近づき、快気功を使う。

「ふっ！」

キン！

快気功がアルヴィンに当たり、正直に戻る。

「……なんでテスラが前にいるんだ？」

「それより今は魔物を倒すのが先！」

私達はミラとローエンの方へと向かう。魔物はミラ達の攻撃でさっきより弱っているが、まだまだ動けるようだ。

「ミラ！」

「ジュード、リンクしてくれ！次で決めるぞ！！！」

ミラとジュードはリンクして魔物に向かう。

「ローエン、リンクして！私達もいこう！」

「承知しました！」

私もローエンとリンクして魔物に向かう。

私とジュードは魔物を挟む様に動き、同時にリンクアーツを放つ。

ミラとローエンはロックトライを、私とジュードは三散花を放ち、まるで合わせ鏡の様に二つの技が魔物に炸裂した。

「「「六散花!!」「」「」

キュイイイイイー!!!

魔物は悲鳴を上げて地面に倒れる。だが、まだ息はあるようだ。

「手強かった…」

「でも綺麗だった…」

「あの魔物はもしかして…」

「この感じ……まさか…」

始めに感じた気配が何なのか、ジュードと私は核心した。その時、ミラが魔物にとどめを刺そうと走り出す。

「「ダメだよ（ダメ）ミラ!!」「」

私とジュードは慌ててミラを止める。

「何故とめる?!」

「よく感じてみてよ…」

「ミラなら、わかるハズだよ…」

すると、魔物が光の粒子となって少しずつ消えていく。

「「微精霊だよ…」」

やがて魔物は完全に光の粒子となって消えていった。

「……ありがとう、二人とも……私は危うく、微精霊達を手につける所だった…」

ミラが私達に感謝した。

「すごかったねー！」

「ええ、わたくしもあれ程の数の微精霊を見た事ありません。」

「すごく幻想的……でした。」

「だね……それじゃ、カラハ・シャルへ……ッツ?!」

キジル海瀑以来の一瞬の頭痛が私を襲い、声が聞こえる。だが、その声はキジル海瀑で聞いた声とは違うものだった。

『ど……か……お助……い……』

(今度は誰? 一体何処に……)

すると……

バシィー!!

唯一の出口に魔法陣が発生して出られなくなる。

「これは…?!」

「まだ装置が動いているのか?!」

「いえ、これは先程展開された魔法陣ではありません……しかし、初めて見る術式ですね。」

そして……

ズゴゴゴゴ……バカァン!!!

空間の一部の壁が崩れ落ち、キジル海瀑で見た巨像が現れる。

「ナニアレ〜?!」

「キジル海瀑で見た巨像…?!」

「何でこんなところに…」

「とにかくやるぞ!」

私達は再び武器を構えた……。

十四話…峡谷の救出劇（後書き）

次はオリジナルの話です。そしてテスラが……お楽しみに！

十五話…巨像再び、目覚めし力（前書き）

やっぱりオリジナルって難しい……（涙）

十五話…巨像再び、目覚めし力

ブン！

ドオオオオン！！

巨像の剣が地面をえぐり、装置を破壊する。

「……この巨像もスゲー力…」

「ゴーレムの一種でしょうか？……しかし、このようなゴーレムは初めて見ますね…」

ローエンは巨像に注意しながらも興味深そうに呟く。

「お、お前なんか怖くないぞー！」

「怖く……ない……です…！」

ティポとエリーゼが震えながらも、巨像に立ち向かう様に言う。

「コアは同じ場所にあったね。」

「だが、今回は緑色だな…」

（前のは青で火属性の攻撃で障壁が破壊できた……なら、緑は…）

「ひょっとして、属性を色で表してるのかも…」

「属性を?……ってうわ?!」

巨像が私達を攻撃してきたので一度回避する。

「邪魔しないで下さい……湧き出でよ、闇の腕……ネガティブゲイト!」

エリーゼが術を発動して、巨像を攻撃する。巨像は一気に腰近くまで破壊されて前のめりに倒れ込む。

「少しは大丈夫かな……テスラ、属性を表すって…」

みんなテスラを注目する。

「前の巨像は青のコアで、火属性のリンクアーツで障壁を破壊できた。つまり障壁は水属性のものだと考えられるんだ。」

「そうか!今回のコアは緑だから、風属性を表しているかもしれないって事だね。」

ジュードは私が言いたい事をすぐに理解した。

「うん。そう考えると、あの障壁を破壊するには地属性のリンクアーツで攻撃しないと破壊できないんだと思う。」

「成る程……確かに一理あります。」

「なら、今度は地属性のリンクアーツで攻めて行けばいいんだな?」

私はアルヴィンに、こくりと頷く。

「ならばやるぞ！あいつを止めなければ、どの道出られないからな。」

ミラがそう言い放ち、私達は巨像に武器を構える。巨像は再生を終えて、今立ち上がろうとしている。

「いくぞ！！」

「「「うん（はい、承知、オッケー、いいぜ）！」」「」」

私達は巨像に向かっていく。先に仕掛けるのはエリーゼの術。

「湧き出でよ、闇の腕……かいなネガティブゲイト！」

術が再び巨像を襲い、足を破壊される。

次は私とローエン。私は左腕に、ローエンは右腕に攻撃をする。

「おりゃ、掌底破！」

「天杯奔流……スプラッシュ！」

両腕も破壊され、その衝撃で後ろに倒れ込む。

「アルヴィン！」

「いくぜミラ様！」

ミラとアルヴィンはリンクして、地属性のリンクアーツを放った。

「「クエイクレイダー!!」」

リンクアーツが障壁にぶつかり火花が散る。

その時……

キイイイイン!!

コアが光り出し、衝撃波が発生する。あまりの事に反応ができず、私達は成す術なく衝撃波に吹き飛ばされた。ジュード達は地面に、私は壁に叩き突けられる。

「っ?! 痛……く?!」

『っ……あ……あ……?!』

頭痛の後、あの声がとても苦しそうにしているのが聞こえた。

さらに事態は悪化する。再びコアが光り出し、私達は風の術で拘束されてしまった。

『くっ…ああああ?!!!』

コアが光り出した瞬間、あの声が悲鳴を上げる。

(まさか、無理矢理力を使われて…)

私は拘束を外そうとするが、全く外す事ができない。ジュード達も同じらしい。ローエンやミラは術で外そうとしたがこれも無理の様

だ。

そうこうしてる間に巨像は再生を終えて、ジュード達へと近いく。

「アニキ!みんな!」

私は尚も拘束を外そうとするが、やはり外れない。

(……このまま何も出来ずに終わる?……いや、私は諦めない!私はアニキを……ミラ達を……あの苦しんでる宝石を……)

“絶対に助け出すんだ!!”

そう思った瞬間、体から何かが溢れる感覚が私を包んだ……。

S I D ..ジュード

「くっ……どうすれば……」

ゆっくりと、確実に巨像は近づく。僕達は風の拘束で動く事ができない。

この状況を打破する方法を考えるが……全く浮かばない。

そうしている間にも、巨像は自分達に近づき、両腕の剣を振り上げた。

「こんな……所で……」

自分達は死ぬのか。

死を覚悟した僕は瞳を力強く閉じる。……みんなが死んでいくのを、見たくなかったから…。

だが……

いつまで経っても痛みや衝撃が来ない。

不思議に思っただけをゆっくり開くと、そこには……

「テスラ?!」

目の前にはテスラがいて、巨像の剣から障壁を出して僕達を守っていた。

「はああああ!!!!」

テスラは叫び、巨像の剣を跳ね返した。巨像はバランスを崩して後ろへ倒れる。

「アニキ、皆、無事？」

テスラは僕達を見て聞いてくる。僕達は啞然としながらも、無事だと思表示する。

今のテスラは普段の薄いグレーをした髪と目ではなく、海のような鮮やかな青をしている。

「テ、テスラ…」

何故そうなったのか理由を聞こうとしたらテスラに遮られる。

「ゴメン……話してる暇はないみたい……」

見ると、立ち上がった巨像が再び剣を振り下ろそうとしている。

「アニキ達はやらせない……!」

すると、テスラは巨像に拳を構え、力を込める。すると、テスラの周りから膨大なマナが渦巻き始めた。マナのうねりは風となって、僕達や空間全体を流れる。

「すごい……」

「何だ……このマナの量は……?!」

ミラは驚愕の表情でテスラを見つめている。

他の皆も同じ様にテスラを見つめた。

そして、巨像が剣を振り下ろすと同時にテスラも巨像に向かって拳を奮う。

「テスラ……!」

普通ならば、テスラはこのまま巨像の剣に切り裂かれる……ハズだった。

だが、僕達が見たのはテスラの拳によって剣を破壊された巨像の姿だった。

「まだだ……青き水流よ、打ち上げろ……アクアレイザー!」

テスラが術を発動する。途端に魔法陣が現れ、そこから水流が発生して巨像を押し流す。

「次で最後だ…！」

テスラは青いオーラを纏い、巨像に向かってダッシュする。

目で追うのもやっとな速さでテスラは巨像の周りを走りながら攻撃していく。

テスラが通った後には青い残像が残る。まるで、青い龍が巻き付く様に……

「青き軌跡……それは龍の如く、穢^{けがれ}を打ち払い、無へと還さん…」

テスラはジャンプして巨像を見る。そして、体に纏うオーラを更に輝かせ、龍の頭部を形取りながらコアがある胸元に突っ込んだ。

「蒼龍滅衝撃^{そつりゅうめつしょうげき}…！」

巨像は胸元に風穴をあけ、そのままガラガラと崩れ落ちていった。テスラを見ると、両手の中には、コアとして埋め込まれた宝石がある。

「テスラ…！」

拘束が解かれた僕達は、テスラの元へと急いで駆け寄る。

「大丈夫?!」

テスラを見ると、床にへたりこんでいる。髪と目は元の薄いグレー

になっていて息がすごく荒い。

「だ、だい……じょ……ぶ……」

「全然大丈夫そうに見えないんですけど？」

アルヴィンに突っ込まれるテスラ。

「ちょ……ちょっと、力……入れ過ぎた……だけ……」

テスラは話すのも辛いらしい。僕はテスラに治癒功をかける。

「ハア……ハア……ハア……ふう……サンキュ、アニキ。……だいぶ……楽になった。」

「なら、いいんだけど……」

そう言った後、テスラの手にあった宝石が淡く光り始めた。

「これは……!」

「また縛られる……?!」

「……です?!」

ローエンは警戒し、ティポとエリーゼがパニックになる。

「大丈夫、だよ……」

テスラが三人に微笑みながら言う。すると、キジル海瀑の時と同じ

く、宝石が宙に浮いて中から宝石と同じ色の宝玉が現れる。そしてそのままスゥ、と消えてしまった。

「あの時と同じ…」

「やはり何度見ても素晴らしいな。」

「今まで見た事がない宝玉ですね…」

「凄かったね、エリー!!」

「うん…とても、綺麗だった…!」

「しかし、何なんだ?あの宝玉…」

僕達は各々の感想を言いながら宝玉が消えた空中を見つめた。

「ローエン!皆さんも、無事でよかった!」

「旦那様?!」

見ると、兵士を連れたクレインさんがいた。

「旦那様、お体は大丈夫なのですか?!」

「ああ、大丈夫だ。ローエン達が閉じ込められたのを見て、急いで街へ戻って兵士達を連れて来たのだが……とにかく無事でよかったよ。」

クレインさんは謎の生物との戦いの時に出口の洞窟に避難させてい

たから、魔法陣が展開された後に兵士を呼びに街へと戻ったらしい。

「とにかく一度街に戻りましょう。ここは危険です。」

僕達はクレインさんの言う通り、カラハ・シャルルに戻る事にした。

「テスラ、街に戻るよ。ほら、立って。」

僕は地面に座ったままのテスラに声をかける。だが、反応がない。

「テスラ……？」

僕はテスラの肩を軽く揺する。すると……

ドサツ！！

テスラは力無く地面に倒れた。

「テスラ?! しっかりして! テスラ!!!!」

僕は何度も呼んだが、テスラが目を覚ます気配はなかった……。

十五話…巨像再び、目覚めし力（後書き）

後半いきなりジュード視点ですが、大丈夫か心配です（汗）

テスラが覚醒（？）しましたが、あまりの負荷に倒れてしまった…
という感じです。

次は後半辺りからテスラ視点に戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7413y/>

テイルズオブエクシリア～紡がれし思い～

2011年12月15日22時46分発行